

---

# 人生オワタ \ (^o^ ) / からポケモンの世界に転生した

ナンテコッタイ!!! < (^o^ ) >

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人生オワタ＼（＾o＾）ノからポケモンの世界に転生した

### 【Nコード】

N2786Z

### 【作者名】

ナンテコツタイ!!!<（＾o＾）>

### 【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようと考えてる。

タイトル変更しました：旧名「ポケットモンスター ジョウトに転生!？」

## Prologue 転生前

？「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タクヤ「はあ、何にもねえな……。つて、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タクヤ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！つて、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だつて言っているだろうが」

タクヤ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神（笑）「お前今、神の後に（笑）付けただる。しかもまた が変わってるし。まあいい。お前には転生してもらおう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タクヤ「ちったア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タクヤ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただる。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこつ。あと、ジヨウト地方だ」  
タクヤ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやるつ。何がいい？」  
タクヤ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになる  
とか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバツクの中に細  
かいことを書いた紙を入れておく」

タクヤ「はい、ありがとうございます。って、うお!?!」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!!!!

タクヤ「どうしてこうなった~~~~~~~~!?!」

To Be Continued . . .

## Episode 1 目覚めると29番道路

タクヤ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タクヤ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちは」と

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タクヤ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスカ。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りにはテッカニン。ポケトレで手に入れた色違いの陽気なツチニンを育てた。

タクヤ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッグは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タクヤ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっかき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タクヤ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タクヤ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。では、良いトレーナーライフを。

神より

タクヤ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであった……

To Be Continued...

## Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タクヤ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。今、自宅を見つけました。

タクヤ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タクヤ「うおっ!!」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タクヤ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メイド「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タクヤ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。お前が



いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性 生活をな……

神より

タクヤ「ブツ！……！」

俺は吹き出してしまった。

メイド「どうされました？」

タクヤ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メイド「ああ、 欲処理のことですか？」

タクヤ「ブツッ！！！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メイド「タクヤ様のご命令とあらば」

タクヤ「そ、そうか……！」

メイド「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タクヤ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メイド「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メイド「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることができません。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……！」

タクヤ「そうか……。おっ、アイツはカイリユウか。こっちにはジ

ユカインもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メイド「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メイド「このパソコンが、転送装置です」

タクヤ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メイド「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メイド「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タクヤ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メイド「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タクヤ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メイド「私と一緒に？」

タクヤ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メイド「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タクヤ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。

ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メイド「了解しました。ではおやすみなさい」

タクヤ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室にきた。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タクヤ「ふう、何かいろいろありすぎたな。美人のメイドさんとい  
い、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ち  
か……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

### Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タクヤ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤっす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タクヤ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タクヤ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流  
行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハッサム「ハッサム！！！」

タクヤ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよ  
ろしくな」

ハッサム「サム、ハッサム！！！」

メイド「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タクヤ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハッサム「ハッサム！！！」

メイド「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。  
いつそ鍛えてやろうか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そうい  
やウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかっ  
たっけ。

タクヤ「ごめんくださいーい！」

ハッサム『ハッサム、ハッサム！』

？「はーい？どちら様？」

タクヤ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「こちらの研究者さんですか？」

研究員「そうだよ。博士に用事？」

タクヤ「まあ、トレーナーとして会っておきたいので」

研究員「そうか。じゃあ入って」

タクヤ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タクヤ「ウツギ博士」

ウツギ「ん？誰だい君は？」

タクヤ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきましたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタمامシシティになっている。

昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウツギ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タクヤ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハッサム『サムサム、ハッサム！』

ウツギ「ははは、元気がいいね。で今日はどういった用事かい？」

タクヤ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな

？とか考えてたりしますけど」

ウツギ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるのか」

タクヤ「マジすか？名前はなんですか？」

ウツギ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タクヤ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウツギ「もちろんだよ。先輩として色々と教えてあげて欲しいし。

そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タクヤ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただので」

ウツギ「そうか。応援してるよ」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハッサム『サム、ハッサムハッサム、サム』

チコリータ『チコー！』

ワニノコ『ワニワニワニ！』ヒノアラシ『ヒノー！』

ハッサム『サムー』

仲良くなってるし……

ウツギ「図鑑は持っているかい？」

タクヤ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウツギ「自作！？君はすごいね！！」  
タクヤ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コトネ「こんにちは〜！」

マリル『リルル〜』

カズナリ「待つてよコトネ〜」

コトネ「カズナリ遅い！」

ウツギ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タクヤ「こんにちは」

コトネ「こんにちは〜。この人は？」

タクヤ「ああ、俺はタクヤ。昨日引っ越してきたトレーナーだよ」

カズナリ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウツギ「昨日引っ越してきたタクヤ君だよ」

タクヤ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモン

のハッサムだ。ほらハッサム、挨拶だ」

ハッサム『ハッサム！サムサム、ハッサムー！』

コトネ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハッ

サム」

マリル『リルル〜』

カズナリ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウツギ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」

タクヤ「みんな頼りになるぞ」

コトネ「うーん、どの子にしようかな……」

カズナリ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コトネ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしく  
って事ね」

カズナリ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チコリータ「チッコー!!」

ワニノコ「ワニワニ!!」

ヒノアラシ「ヒノ〜……」

ハッサム「ハッサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなく  
て落ち込んだヒノアラシをハッサムが慰めていた。

タクヤ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カズナリ「タクヤさんが？」

コトネ「勿論、いいって事ね」

チコリータ「チッコー!!」

ワニノコ「ワニー!!」

ハッサム「サムサムー!!」

タクヤ「サンキュー!。ハッサムもこいつらと仲がいいみたいだし、  
喜んでるよ」

ということ、俺たちは旅立つ

ウツギ「ちょっと待ってくれるかい？」

タクヤ「何ですか？ウツギ博士」

ウツギ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タクヤ「いいんですか？」



ウツギ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」  
タクヤ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウツギ「何だいそれは？」

タクヤ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウツギ「それも自作？すごいね君は」

コトネ「ほんとにすごいって事ね」

タクヤ「もしもし？」

メイド「タクヤ様、どうされました？」

タクヤ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」

メイド「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タクヤ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハッサム『ハッサム！』

タクヤ「よし、出てこいバクフーン！」

バクフーン『バクッ！』

カズナリ「うわー、バクフーンだ！」

タクヤ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バクフーン『バク！』

ハッサム『ハッサム！』

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カズナリ「こう見ると親子みたいですね」

バクフィン『バクバク!』

ヒノアラシ『ヒノー』

タクヤ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん!」

カズナリ「はい!」

ハッサム『ハッサム!』

ウツギ「じゃあ気を付けてね」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued . . .

## Episode 4 自己紹介 新人トレーナーコトネ&amp;カズナリ

どうも、タクヤです。29番道路にきています。

タクヤ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タクヤ「俺はタクヤ。年は16だ。トレーナー歴6年で今年が7年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カズナリ「よろしくお願いします」

コトネ「よろしくって事ね」

タクヤ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は3つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タクヤ「テッカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コトネ「すごい！テッカニンの色違い!？」

カズナリ「ガブリアスも強そうですね！」

テッカニン「テッカ!！」

ゲンガー「ガー!！」

ガブリアス「ガアブツ!！」

次はコトネの番か……

コトネ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリー

タ。よろしくって事ね」

マリル『リルル〜』

ハツサム『ハツサム!』

チコリータ『チコー!』

カズナリ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」

ワニノコ『ワニワニ!』

タクヤ（そっぴゃ、俺が願えばポケモンの個体値が6Vになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを6Vにすべく願う。

タクヤ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を6Vにしる!）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神「早速6Vの願いか……」

タクヤ「神様!?!」

神「願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は6Vだ」

タクヤ「サンキュー神様」

この念話の時間僅か0・01秒。

タクヤ「まあよろしくな、コトネ、カズナリ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

タクヤ「そうだ。コトネ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」

コトネ「いいね、それ」

カズナリ「はい」

タクヤ「カズナリ、審判頼む」

カズナリ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗つけた。

カズナリ「これより、タマムシシティのタクヤ対ワカバタウンの  
トネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」

タクヤ「行くぜえヒノアラシ！」

ヒノアラシ「ヒノーーー！！！！！」

背中が燃え上がった。

タクヤ「まずは使える技の確認つと……」

ヒノアラシ 火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲わ  
れると、背中を燃え上がらせて身を守る。

使える技は 体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸く  
なる、スピードスター、火炎放射、転がる

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしてい  
るので、二人は気づいていない。

コトネ「行くわよチコリータ！」

チコリータ「チッコー！！！」

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使  
えたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タクヤ「先行はそつちでいいぜ」  
カズナリ「先行はコトネから。では、始め！」  
コトネ「先手必勝！チコリータ、葉っぱカッター！」  
タクヤ「ヒノアラシ、ジャンプだ！」  
チコリータ「チイー、ツコー！！！」  
ヒノアラシ「ヒノーーーーー！」

チコリータは葉っぱを飛ばすが、ヒノアラシは飛び上がった。

タクヤ「ヒノアラシ、回転しながら煙幕撒布！」  
ヒノアラシ「ヒノオーーーーーー！」  
コトネ「チコリータ、気を付けて！」  
チコリータ「チー」  
タクヤ「残念、ヒノアラシは地面の下だ！ヒノアラシ、地面から顔を出して火の粉！！！！！」  
ヒノアラシ「ヒノーーーーー！！！！！」  
コトネ「す、すごい。穴から顔を出して攻撃なんて……！！！」  
タクヤ（貰ったばかりなのにスピードもパワーも段違い。おまけに技は全部使える。どうということだ……??）

考えていると、またもや念和が来た。

神「どうだ？お前のポケモンのパワーは」  
タクヤ「どうということだ？」  
神「お前が手に入れた時点ではそう強くないが、6Vにしたときにお前のポケモン限定で、全能力の努力値を252にするのと、技をすべて覚えさせることをした」  
タクヤ「だからか……」

この間僅か0.01（ry

タクヤ「さあ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」

ヒノアラシ「ヒノオー！！」

チコリータ「チコー。チコオ……」

コトネ「ああ、チコリータ！」

カズナリ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タマムシシティのタクヤ！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」  
バクフーン「バクバク！」

ヒノアラシ「ヒノオノノ」

コトネ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」

チコリータ「チコオ……」

タクヤ「なあ、コトネ、カズナリ」

コトネ「何？」

カズナリ「なんでしょう？」

タクヤ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わること  
って、知ってるか？」

コトネ「エツ？」

カズナリ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるところでしょう。

タクヤ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチや  
ワソリキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポツポ  
なんかだ。特殊攻撃ならケーシヤゴース。防御ならイシツブテや  
グライガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリヤードだ。また、性  
格によっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、  
特殊攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これ  
は俺が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タクヤ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルはやんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。やんちゃは攻撃が伸びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気ってところだろう。この世界では物理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タクヤ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」  
コトネ「ありがとう」

カズナリ「勉強になりました」

タクヤ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシティのポケモンセンターを目指そうぜ」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バクフーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued...



## Setup 1 タクヤ

〈名前〉

タクヤ

〈姿、服装〉

髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵

顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く

細身の黒いフレームのメガネをかけている

身長は178cmくらい

服装はグレーのズボンに空色のYシャツで、上にベージュのコー

トまたは黒のパーカーを着ている

また、偶にだがスーツを着ることがある

〈人物〉

年は16

基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない

怒ると物凄く怖い

ポケモン廃人

〈ポケモン〉

転生時の手持ちは色違いのテツカニン、ガブリアス、ゲンガー、

ハッサム、カイリキー、マルマイン

自宅にはたくさんのポケモンがいる

## Episode 5 ポケモンセンターとコトネの初ゲット

タクヤ「ここがヨシノシティか……」

どーも、タクヤです。ただいまヨシノシティに来ております。

タクヤ「おい、コトネー、カズナリー！ポケモンセンター行くぞー！」

コトネ「待つてー！」

カズナリ「待つてくださーい！」

俺たちはポケモンセンターに来た。まずはポケモンの回復をしないとな……

タクヤ「ほら、回復してもらうぞ。戻れハッサム、バクフーン、ヒノアラシ」

コトネ「あつ、私も」

カズナリ「僕も」

タクヤ「ジョーイさん、どのくらいで回復は終わりますか？」

ジョーイ「一時間くらいです。そういえば、ジョウトリーグの出場受付はしましたか？」

タクヤ「あつ、まだです。はい、トレーナーカードと図鑑。お願いします。コトネ、カズナリ、お前らはリーグ出場しないのか？」

コトネ「カズナリはしないけど私はするって事ね。図鑑とトレーナーカード、お願いします」

ジョーイ「はい、わかりました」

数分後、受付を終えたのか、ジョーイさんが戻ってくる。

ジョーイ「はい、終わりました。では、頑張つてジムバッチを8つ  
全て集めてください」

タクヤ「はい。ありがとうございます」

コトネ「ありがとうございます」

タクヤ「ああ、カズナリはどうするんだ？」

カズナリ「僕はブリーダーを目指しているので」

タクヤ「そか」

うーん、これからどこで時間を潰そう……

タクヤ「そうだ！コトネ、カズナリ、西の海岸で釣りしようぜ」

コトネ「釣り？」

カズナリ「いいですね。しましょうよ」

タクヤ「おう」

俺たちは海岸へ向かった。さて、何が釣れるか……

タクヤ「まず、コトネは女の子だからこの軽いやつにしておこうか」

コトネ「ありがとって事ね」

タクヤ「カズナリも非力そうだからこれかな？」

カズナリ「非力って……」

タクヤ「で、俺はこれで。餌はこれを自由に使っている」

と言って、神様からもらったバッグに入っていたポケモンフーズ  
を差し出した。

タクヤ「じゃ、俺から行くぜ！」

俺が海に糸を垂らす。すると二人も順に垂らしていった。

十分後

暇だ。釣れない。

タクヤ「何も釣れねえ……」

そんなことをつぶやいた直後、コトネの釣竿がクイツ、と引っ張られた。これは大きいな。

コトネ「ちよっ、一人じゃ無理！」

タクヤ「ハア……。ちよっと貸してみる。フンッ」

俺がリールを巻いたり、引っ張ったりしても少し動くだけ。かなりでかいな……

コトネ「もう無理ー！」

タクヤ「諦めんな！う、うおおおおおおお！……！……！」

俺は雄叫びを上げながら思いっきり引き上げた。するとそこに食

いついていたのは……

キングラー『ゴキゴキ!』

超デカイキングラーだった。

コトネ「うわあ、キングラーだ!」

コトネは図鑑を取り出し検索した。

キングラー ハサミポケモン。クラブの進化系。あまりにも 大きくなりすぎた ハサミは 持ち上げるのが やつとで 狙いは 上手く 付けられない。

タクヤ「やつべえ、ポケモン預けてていねえじゃん!」

カズナリ「そうですね、ポケモンセンターに預けてるんですよ!」

そう、ポケモンセンターに預けているためポケモンがいないのだ。

タクヤ「しょうがない、転送装置で。おい!」

メイド「なんでしょう」

タクヤ「緊急事態だ! マルマインを送れ!」

メイド「了解しました」

タクヤ「よっしゃあ! 来い、マルマイン!」

マルマイン『マルン! マルルルン!』

タクヤ「マルマイン、少しの間コトネの言うことを聞いてくれ!」

マルマイン『マルルン! マルン!』

タクヤ「コトネ、俺のマルマインを使え!」

コトネ「ありがとうって事ね! 技は!?」

タクヤ「多分お前の思いついた技はたいてい覚えてるぞ! 適当に弱

らせる！」

コトネ「わかった！マルマイン、10万ボルト！」

マルマイン『マルルルルル！！！』

キングラー『ゴキゴキ！！！！』

キングラーは10万ボルトが直撃し、仰け反ったが体制を立て直してハサミを構えた。

タクヤ「来るぞ、クラブハンマーだ！マルマインは素早いからよけられるはずだ」

コトネ「マルマイン！避けてから転がる！」

キングラー『ゴキ！ゴキゴキッ！！』

マルマイン『マル！マルルル！』

キングラー『ゴキッ！』

コトネ「マルマイン！電磁波！」

マルマイン『マルルルルルルルル』

キングラー『ゴ、ゴキ……ゴ……キ』

タクヤ「今だ、コトネ！」

コトネ「行けっ、モンスターボール！」

キングラーはボールに収まり、スイッチが点滅し、揺れ始めた。

一回。二回。三回。パチンツという音が鳴った。

コトネ「キングラー、ゲットって事ね！」

カズナリ「やったじゃないかコトネ！」

タクヤ「スゲエぞコトネ」

コトネ「そんなに褒められると照れるって事ね」

マルマイン『マル、マルルルル』

タクヤ「コトネのサポート、サンキューなマルマイン」

マルマイン『マルルル』

タクヤ「じゃあ戻れ、マルマイン」

俺はマルマインをボールに戻し、転送した。

タクヤ「そうだコトネ、キングラーを出してくれ」

コトネ「わかった。出てきてキングラー！」

キングラー『ゴキ……ゴキ……キ』

タクヤ「やっぱ傷ついてるな。えっと、こうしてこうしてっ」と

俺はキングラーの処置をした。

タクヤ「はい、終わり」

カズナリ「すごいですねー。ブリーダーとして見習わないと」

キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ』

タクヤ「そろそろポケモンセンターで治療も終わったんじゃないか？」

コトネ「そういえば忘れてた。行こうって事ね」

カズナリ「そうだね」

俺たちはまたポケモンセンターに向かっていった。

To Be Continued...

Episode 6 キングラーの初バトル!? 高速蟹の恐怖!!

タクヤ「ジョーイさん、回復終わりましたか？」

ジョーイ「はい、終わりましたよ。あら？そのキングラーさつき捕まえたの？」

コトネ「そういう事ね」

キングラー『ゴキゴキ』

カズナリ「手持ちがない状態で出てきたので大変でした」

タクヤ「だな」

ジョーイ「君たち、最初のジムのことなんだけど、ここから北北西に最初のジムの街、キキョウシティがあるわ」

タクヤ「マジすか？ありがとうございます」

ジョーイ「頑張ってくださいね？」

コトネ「頑張るって事ね、キングラー」

キングラー『ゴキッ！ゴキゴキッ！』

俺たちは最初のジムの街、キキョウシティへ向かうため、ポケモンセンターを後にした。

タクヤ「ここは30番道路だな……」

コトネ「キキョウシティはどのくらい先にあるの？」

カズナリ「この本によると、結構歩くみたいだよ」

タクヤ「ま、歩くのも旅の醍醐味だ」

？「ちよつといいかい？」

俺たちはキキョウシティを目指して歩いていると、誰かが話しかけてきた。

タクヤ「誰だい？」



シュウ「僕はシュウ。この中の誰か、僕と勝負してくれないか？」  
タクヤ「勝負か……。コトネ、お前がしたらどうだ？」  
コトネ「えっ、私!? 別にいいけど……」  
タクヤ「よし決まりだ。カズナリ、審判な」  
カズナリ「はい」

シュウとコトネの勝負が決まり、ちょっとした広場に向かう俺達。

カズナリ「これより、コトネ対シュウのポケモンバトルを始めます！ お互い使用ポケモンは一体! どちらかが先に戦闘不能になったとき、負けとします! なお、道具の使用は認められません!」  
コトネ「じゃあ私から行くわ! 行けっ、キングラー!」  
キングラー『ゴキゴキッ!』

タクヤ「ほう、キングラーの初バトルか……。あ、そうだ6v6v」  
俺はキングラーを6vにしると願った。これでキングラーは6vだ。

タクヤ「さて、シュウとやらは何を出してくるか……」  
シュウ「相手はキングラーか……。それなら、行けっスピアー!」  
スピアー『スピスピ!』  
タクヤ「スピアーか……。こりゃあスピードが厄介だぞ……」  
コトネ「スピアーか……」

コトネは図鑑を取り出し、スピアーと、キングラーの技を調べた。

スピアー 毒蜂ポケモン。コクーンの進化系。どんな相手でも強力な毒針で仕留めてしまう。偶に集団で襲ってくる。

キングラー 使える技は、高速移動、怪力、馬鹿力、剣の舞、クラ

ブハンマー、鉄壁、はさむ。

タクヤ「高速移動？遺伝技じゃないの？」

コトネ「高速移動と剣の舞が使えるのね、キングラー」

カズナリ「それでは、始め！」

コトネ「まずはこつちから行くわ！キングラー、高速移動！」

カズナリの相図でコトネが先手を決めた。

キングラー『ゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキ……！！！！！！！！！！』

タクヤ「は、<sup>はえ</sup>早えええええ……！！！！！！！！！！」

シュウ「な、なんなんだよそれ、本当にキングラーか！？クソツ！

スピアー、ダブルニードル」

スピアー『スピツ！』

コトネ「まだよ！キングラー、もう一回高速移動でスピードを上げてかわして！」

キングラー『ゴキゴキゴキゴキツ……！！！！』

シュウ「あ、当たらない！？」

コトネ「今度はこつちの番！キングラー、剣の舞3連発！」

キングラー『ゴ、ゴキキキキキキキキキキキキキ……！！！！！！！！！！』

！！！！！！！！！！』

タクヤ「……ああ、どんどんキングラーが凶悪に……」

シュウ「まだまだ！スピアー、シザークロス！」

スピアー『ス、スピアアアアアアアアアア……！！！！！！！！！！』

コトネ「まだまだ高速移動……！！！！！！！！！！』

キングラー『ゴキアアアアアア……！！！！！！！！！！』

コトネ「いくわよっ！キングラー、怪力……！！！！！！！！！！』

キングラー『ゴキキキキキキキキキキキキキ……！！！！！！！！！！』

俺は目を疑った。キングラーが、なんと、飛翔とんだのだ！

ギョーンッ!!、と風切り音が鳴ったと思ったら、スピアーより遙かにキングラーがいて、そのまま高速落下して怪力を決めた。

スピアー「スッ!? スピイイイイイイイイイツッ!!!!!!」  
「!」  
シュウ「スピアー、かわせっ!かわすんだ」

シュウの叫びも虚しく、キングラーの高速かつ強力な一撃で勝負は決した。

タクヤ「……こんな戦い方も、あるんだな……」

そんな小さなタクヤの眩きが、虚空に消えた。

スピアー「……ス……スピ……スピア……」  
カズナリ「スピアー、戦闘不能!よって勝者、コトネ!」

タクヤ「すごかったぞ、コトネ」

コトネ「やったあ!!!」

シュウ「ありがとう、コトネ。君のキングラー、すごかったよ」

コトネ「ありがとう、シュウ」

シュウ「まさか、キングラーが飛翔とぶとは思わなかったよ」

カズナリ「僕も、目を疑いました」

これ以来このバトルは、俺の記憶の中で、「高速蟹の恐怖」と名付けられた。

次に向かうはキキョウシテイ!

To Be Continued...

Episode 7 キキョウシティ マダツボミの塔のオバケ騒動!!

タクヤ「ついでに、ここがキキョウシティだ」

ども、タクヤです。俺たちは今、やっとキキョウシティにつき  
ました。

タクヤ「こんばんは、ジョーイさん」

そう、「こんばんは」ということからわかるように、ついでのは  
夜だった。

ジョーイ「はい、こんばんは」

コトネ「あれ？ジョーイさんさっきまでヨシノシティにいませんで  
したか？」

ああ、アニメポケモンのあの設定知らないのか……

タクヤ「コトネ、カズナリ、これを見る」

コトネ「えっ!?!」

カズナリ「これって!?!」

俺が見せたのはガイドブックのようなものだ。つまり……

コトネ「カズナリ「みんな同じ顔!?!?!」

タクヤ「そ。全国のジョーイさんは全員がそっくりで、しかも何ら  
かの繋がりがあるんだ。ああ、ジュンサーさんも同じだぞ」

カズナリ「それは知りませんでした……」

コトネ「すごいわね」

タクヤ「ま、それはそうとして、ポケモンの回復お願いします。あと、部屋はあいてますか？」

ジョーイ「はい、お預かりします。部屋は二人部屋が一部屋だけならあいてますよ」

タクヤ「そつすか。じゃあそこつておきます」

ジョーイ「はい」

コトネ「二人部屋つて、一人どうするの？」

カズナリ「まさか野宿するんじゃない?」

タクヤ「バカ言え。俺はソファとかで寝るからベッド使え」

コトネ「それはタクヤに悪いよ」

カズナリ「そうですね。タクヤさんがベッド使ってください」

タクヤ「人の好意は素直に受け取るもんだぞ?」

カズナリ「わかりました。ありがとうございます」

コトネ「ありがとう、タクヤ」ニコッ

タクヤ「お、おう。どういたしまして。じゃ、じゃあおやすみ／＼」

俺たちは眠りにつき、朝を迎えた。

タクヤ「よし!ジム行くぞ!」

コトネ「おー!」

カズナリ「頑張ってください!」

タクヤ「おう!」

俺たちはジムに行き、ジム戦の予約をしようとしたのだが……

受付「お二人はマダツボミの塔には行かれましたか?そこでお坊さんのお師匠様に勝たなければジム戦は認められません」

タクヤ(ヤベツ、忘れてた)

コトネ「そんな」

カズナリ「ま、まあ行けばいいじゃないか」

受付「それはそうと、こんな噂を知っていますか？」

タクヤ、コトネ、カズナリ「噂？」

受付「なんでもマダツボミの塔は夜に登ると、オバケが出るそうですよ」

カズナリ「お、オバケ〜!？」

タクヤ「面白そうじゃん。どうせなら夜に行こうぜ!（どうせオバケの正体はゴースだと思っし、こいつらのどちらかに捕まえさせたいし）」

カズナリ「え〜!？」

コトネ「あ〜、カズナリ怖いんだ〜」

タクヤ「ま、いいや。さっさと夜まで時間潰そうぜ」

カズナリ「そ、そんな〜……」

俺たちは夜まで時間を潰し、マダツボミの塔に来た。

タクヤ「よし、来たぞマダツボミの塔!」

コトネ「じ、実際に見ると結構雰囲気あるって事ね……」

カズナリ「もうやめましようよ〜」

タクヤ「よし、いくぞ〜!」

俺は二人に有無を言わずマダツボミの塔に入った。

タクヤ「ま、一応ポケモン出しとくか。出てこいテッカニン!」

テッカニン『テッカ!』

コトネ「うう、マリル〜」

マリル『リルル〜!』

カズナリ「気絶中 俺が引つ張ってる

うーん、何も無い。

と、そのとき……

? 『ゴースゴースゴース W W W』

? 『ゴースゴースゴース W W W』

? 『ゴースゴースゴース W W W』

コトネ「!? 笑い声が!」

タクヤ「やっぱこの声はアイツかよ」

カズナリ「アイツ?」

タクヤ「テツカニン、素早さで翻弄して当たり一体を辻斬りでかき回せ!」

テツカニン『テツカ!』

? 『ゴ?ゴ?ゴ?ゴース!!!ゴースゴース!!!ゴース!!!』

タクヤ「さて、さっさと姿を見せる、ゴース!」

コトネ「ゴース!?!」

カズナリ「と、いうことは幽霊の正体って」

タクヤ「そういうことだ」

そこでコトネが凶鑑を取り出した。

ゴース ガス状ポケモン。薄い ガスのような 体で 何処にでも

忍び込むが 風が 吹くと 吹き飛ばされる。

ゴースA 『ゴ……ゴース』

ゴースB 『ゴスゴス!』

ゴースC 『ゴース!』

タクヤ「さ、テツカニン、もう一回辻斬り!」

テツカニン『テツカ!テツカ!』

ゴースA 『ゴ……』

一体のゴースは完全に戦闘不能になってしまった。

ゴースB「ゴース!!!!!!」  
ゴースC「ゴスゴス、ゴース!!!!!!」  
コトネ「ゴースと分かれれば怖くないって事ね。マリル、水鉄砲!」  
マリル「リイ、ルウウウウウウ!!!!!!」  
ゴースC「ゴ?ゴオオオオオオオオ!!!!!!」

さらにもう一体のゴースは水鉄砲で場外に吹っ飛ばされた。

カズナリ「ワニノコ、お願いします!」  
ワニノコ「ワニワー!!!!!!」  
カズナリ「噛み付く!」  
ワニノコ「ワニっ!」  
ゴース「ゴ!?ゴ……ース」  
カズナリ「今です!モンスターボール!」

カズナリはモンスターボールを投げた。スイッチ部分が点滅し、ボールが揺れる。数回揺れたところで、パチンツ!という音が鳴った。

カズナリ「ゴース、ゲットです!!」  
ワニノコ「ワニワニワー!!!!!!」  
タクヤ「良かったな、カズナリ」  
コトネ「そうね」  
タクヤ「じゃ、お坊さんのお師匠様に会いに行こうか」  
カズナリ「はい!」  
コトネ「うん!」  
テツカニン「テツカ!!!」  
ワニノコ「ワニっ!!!」  
マリル「リルウ」



こうして、ゴースをゲットしたカズナリ。次に目指すは、マダツ  
ボミの塔の頂上。

T o B e C o n t i n u e d . . .

## Episode 8 マダツボミとお師匠様!!

タクヤ「ふう、やっと頂上か……」

コトネ「高いつて事ね……」

カズナリ「疲れた……」

マリル「リルル」

ここはマダツボミの塔の頂上。あれがお坊さんのお師匠様だろう。ここまでくるのは大変だった。ゴースが他にもいて、カズナリのゴースに説得を任せたり、お坊さんが立ちほだかったり。

タクヤ「貴方がここのお坊さんのお師匠様、ですね？」

師匠「いかにも。こんな夜更けに、お主らはわしに挑戦するのか？」

タクヤ「はい」

コトネ「私もです」

師匠「よかろう。ではまずそちらの少年、バトルを始めようか」

タクヤ「はい！」

坊主「では、ただいまより、お師匠様対挑戦者のタクヤのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは三体！先にすべてのポケモンを失ったものの負けとします！」

タクヤ「行くぜヒノアラシ！」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ!!」

師匠「行きなさいマダツボミ！」

マダツボミ「マダツボ」

坊主「それでは、始め！」

師匠「こちらから行かせていただく。マダツボミ、ツルの鞭！」

マダツボミ「マダマダ」

ツルの鞭がヒノアラシに襲いかかる。

タクヤ「ヒノアラシ、バックスステップで交わしてジャンプ！そこからフィールド全体に火炎放射！」  
ヒノアラシ『ヒノツ、ヒノツ、ヒノツ！ヒノツツツ！！！ヒイイイ、ノオオオオオオオオ！！！！』

フィールド全体を炎が包む。そこに居たのは黒焦げになって倒れているマダツボミだった。

坊主「マダツボミ、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

タクヤ「よくやったぞヒノアラシ。もう一回頼む」

ヒノアラシ『ヒノツ』

師匠「ほう。お主なかなかやりおるな。ポケモンへの気遣いも忘れない。良いトレーナーじゃな。次は、ウツドン！行きなさい！」

ウツドン『ウツドオン……』

タクヤ「ありゃ、進化系か」

コトネ「あれがウツドン。さすがお師匠様。持ってるポケモンが違うって事ね」

ウツドン「ハエ取りポケモン。マダツボミの進化系。体内では強力な溶解液を精製しているが、それを分解する物質も精製しているので自分は溶けたりしない。」

タクヤ「相手にとて不足なし！ヒノアラシ、穴を掘る！」

ヒノアラシ『ヒノヒノツ！！』

師匠「ウツドン、地面の揺れを感じるんじゃ」  
ウツドン『ウツツドオン！』

カタ、カタ、と地面が揺れる。だが……

師匠「ウツドン、そこじゃ！ソーラービーム！」  
ウツドン『ウツドオオオオオオオン！！！！』  
タクヤ「フツ。ヒノアラシ、噴火！」  
ヒノアラシ『ヒノオオオ！』

揺れたのはダミー。後ろではなくしたから噴火を繰り返した。これだけでウツドンは戦闘不能になる。

師匠「まさか、ここまでとは」

坊主「ウツドン、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

師匠「では、こちらを倒せるかな？来い、ヨルノズク！！！」

ヨルノズク『クルルル！！！！』

カズナリ「ヨルノズクですか！？」

タクヤ「まだ行けるな、ヒノアラシ？」

ヒノアラシ『ヒノッ！』

そのとき、ヒノアラシの体が光に包まれた。

コトネ「あの光は！！！」

カズナリ「進化ですか！？」

タクヤ「進化か……」

マグマラシ『マグッ！！』

師匠「お主のヒノアラシ、進化したか……。ヨルノズク、ゴッドバード！」

ヨルノズク『クルルルルル！！！！』

ヨルノズクの体が淡く発光する。

タクヤ「マグマラシ、スピードスター！」

マグマラシ『マグウ！！！！』

ヨルノズク『クルツ!?クルルルルル!』

マグマラシの星形の光線がヨルノズク目掛けて飛んでいく。だが、ヨルノズクもゴッドバードの溜めを終え、突進してくる。

師匠「ヨルノズク、ゴッドバードの起動を変えてマグマラシに攻撃しなさい!」

ヨルノズク『クルルル!クルツ、クルツポー!!!!』  
マグマラシ『マグマツ!?マゲウ、マゲツ!』

マグマラシはモロにゴッドバードを受けてしまったが、無理やり軌道修正されたゴッドバードは威力もない。

タクヤ「マグマラシ、火炎放射でフィニッシュ!」

マグマラシ『マア、ゲウウウウウ!!!』

ヨルノズク『クルツ!?クル……ルルル……ル……』

坊主「ヨルノズク、戦闘不能、マグマラシの勝ち!よって勝者、挑戦者タクヤ!」

タクヤ「やったぜ!マグマラシ、ありがとう!」

マグマラシ『マグマゲツ』

コトネ「タクヤ、すごいよ!」

カズナリ「素晴らしいバトルでした!」

師匠「戻れ、ヨルノズク!ゆっくり休め。いやあ、お主タクヤと言ったな?素晴らしいバトルじゃった。良いトレーナーを目指せよ?」  
タクヤ「はいっ!」

お師匠様に勝ったタクヤ。コトネも同じくバトルしたが、チコリータ、マリルが戦闘不能になりながらも、「高速蟹の恐怖」の再来で勝った。いよいよ明日はキキョウジムだ!!!

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
.  
.  
.

## Episode 9 初ジムバトル!! タクヤvsハヤト!!

タクヤ「すみません、ジム戦しに来ました」

ハヤト「チャレンジャー挑戦者は君かい？俺はジムリーダーのハヤト。鳥ポケモン使いさ」

タクヤ「ハヤトさん、ジム戦は俺だけじゃなくて、後ろのコトネもです」

コトネ「私もお願いします」

ハヤト「そうか。じゃあどちらから先にする？」

タクヤ「俺から行きましょう」

ハヤト「そうか。じゃあバトルフィールドの方に行こうか」

タクヤ「はい」

バトルフィールドに移動した俺たち。鳥ポケモンは飛べるから気を付けないとな。

コトネ「頑張ってる事ね」

カズナリ「頑張ってください、タクヤさん」

タクヤ「おうよ」

ハヤト「それじゃあはじめようか」

いよいよ初のジムバトル。楽しみだな。

審判「これより、ジムリーダーのハヤト対チャレンジャー挑戦者、タマムシシティのタクヤのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。道具の使用は認められません」

タクヤ「本気でいきますよ？」

ハヤト「ああ、本気で来い！」

タクヤ「行けっ、ハッサム！」

ハッサム『ハッサム！！』

ハヤト「君のポケモンはハッサムか。それなら、行け、ピジョット  
！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！！！！』

コトネ「あれがピジョット……」

カズナリ「すごく強そうですね」

カズナリはポケモン図鑑を取り出し、検索した。

ピジョット 鳥ポケモン。ピジョンの進化系。発達した 胸の筋  
肉は、軽く 翔いただけで 大風を 起こせるほどである。

審判「先行は挑戦者から。<sup>チャレンジャー</sup> それでは、バトルスタート！！」

タクヤ「いくぜハッサム！！高速移動からの影分身！！」

ハッサム『ハッサム！ハッサムハッサム！！』

コトネ「タクヤのハッサム、すごく速い。それに分身の数もすごい」

カズナリ「さすがタクヤさんのポケモン。よく育てられているよ」

ピジョット『ピジョッ！？ピジョッ、ピジョッ！』

ハヤト「落ち着けピジョット！分身をすべて巻き込むように風おこ  
し！！」

ピジョット『ピジョー……ッッッ！！！』

タクヤ「甘い！ハッサム、飛翔！！」

ハッサム『ハッサム！！！！！』

ハッサムは高速で羽を翔かせ、分身全てが飛翔した。

タクヤ「行くぜ！バレットパンチからの燕返し！！」

ハッサム『ハッサム！ハサハッサム！！』

ハヤト「速い！？ピジョット、よける！」

タクヤ「もう遅い！ハッサム！」



ハッサム『ハッサム!!!ハッサ、ハッサ、ハッサム!!!』

ハッサムはピジョットに突進し、弾丸のような連続パンチでピジョットを地上に撃ち落としたあと、馬乗りになってハサミで数回斬撃を繰り返す。

ピジョット『ピジョッ!』

ハヤト『ピジョット、抜け出してフェザードダンスからの羽休め!』

ピジョット『ピジョピジョピジョッ!!!ピジョ、ピジョ。』

タクヤ『回復技ですか……。しかもフェザードダンスで攻撃を下げるのはいい判断だと思う。だが、まだ甘い!ハッサム、剣の舞三連発!』

ハッサム『ハッサム、ハッサム、ハッサム!!!』

ハッサムが力強く舞う。剣のような影が見えたかと思うと、ハッサムの攻撃が大きく上昇した。

ハヤト『こっちは勝負に出るぞ、ピジョット!ブレイブバード!!!』

!!!』

ピジョット『ピジョーーーーー!』

!!!』

ピジョットが羽を小さく折りたたみ、低空を高速で飛行していた。大きなダメージを自分が負うかわりに、相手にも大ダメージを与える技。それがブレイブバードである。

ハッサム『行け!ピジョット!!!』

ピジョット『ピジョーーーーー!』

タクヤ『だったらこっちも勝負に出るぜ!ハッサム、ダブルアタック!!!』

ハッサム『ハッサム！ハッサム！』

コトネ「いよいよ勝負に出るって事ね！」

カズナリ「頑張ってください、タクヤさん！」

タクヤ、ハヤト「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお！……………」

ピジョット『ピジョー……………ツツツツツツ！！！！！！』

ハッサム『ハッサ、ハッサム……………！！！！！！』

ズドオオオオオオン……………と大きな爆発が巻き起こる。爆  
風による気振りが消えたとき、そこに立っていたのは……………

ピジョット『ピジョット……………』

ハッサム『ハッサ……………』

なんと両方立っていた。どちらもキツそうだ。

ハヤト「次で決まりそうだね」

タクヤ「そうですね」

ハヤト「じゃあ行くぞピジョット、翼で打つ！」

タクヤ「ハッサム、バレットパンチ！」

ハッサム『ハッサムツツ……………！！』

ピジョット『ピジョット！ピ……………ジョ……………』

技を出そうと、ピジョットが構えたところで倒れてしまった。

審判「ピジョット、戦闘不能。ハッサムの勝ち。よって勝者、挑戦チャレン  
者ジャータママシシテイのタクヤ」

タクヤ「よっしゃ……………！！勝ったぞハッサム……………！！」

ハッサム『ハッサム……………！！ハッサムハッサム……………！！』

俺はハッサムに抱きついた。

タクヤ「ありがとうハッサム」

ハッサム『ハッサム』

ハヤト「戻れピジョット。よく頑張ったな。おめでとう、タクヤ君。これは勝者の証、ウイングバッジだ。貰ってくれ」

タクヤ「よっしゃ！ウイングバッジ、ゲット！！！！」

ハッサム『ハッサム！！！！』

コトネ「タクヤ、おめでとうって事ね！」

カズナリ「おめでとうございます、タクヤさん」

タクヤ「ああ、ありがとう。コトネ、次はいよいよお前のジム戦だ。はじめてのジム戦頑張れよ！！」

コトネ「うん！」

ハヤト「そしたら、ポケモンを回復したらすぐにはじめようか」

コトネ「はい！お願いします、ハヤトさん」

ハヤトとのジム戦に勝利することができたタクヤ。次はいよいよコトネのジム戦。コトネはハヤトに勝つことができるのか。

To Be Continued . . .

## Episode 10 コトネのジムバトルと繋がりのお窟

ハヤト「コトネちゃん、回復も終わったからすぐにジム戦を始めようか」

コトネ「よしっ、頑張るって事ね」

カズナリ「頑張れ、コトネ」

タクヤ「俺も応援してるぜ」

ここはキキヨウシティポケモンセンター。キキヨウシティジムリーダー、ハヤトのポケモンの回復も終わり、ついにコトネの初ジムバトルが始まるうとしていた。

審判「ではこれより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。ポケモンが先に倒れたほうが負けとなります。なお、道具の使用は認められません」

ハヤト「タクヤ君には負けただけど、次はそうはいかないよ！行けっ、ピジョット！」

ピジョット『ピジョー！ッッ！！』

コトネ「だったら私も本気で行くって事ね。出てきて、マリル！！マリル『リルル』」

審判「それでは、バトルスタート！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」

マリル『リイ、ルーーーーー！！！！』

ハヤト「かわして翼で打つ！」

ピジョット『ピジョー！ッッ！！』

コトネ「マリル、ジャンプ！そこから体当たり！」

マリル『リルッ！リルーーーーッ！！！！』

ピジョット『ピジョッ！？ピジョー！ッッ！！！！』



マリル『リイ、ルー……ッツツ……!!!!』

ピジヨット『ピジヨット!ピジヨット!!!!ピ……ジヨ……』

審判「ピジヨット、戦闘不能。マリルの勝ち!よって勝者、チャレンジャー挑戦者

コトネ」

コトネ「やったー……!!!!」

タクヤ「スゲエぞコトネ!」

カズナリ「やりましたね、コトネ!」

ハヤト「タクヤ君とのバトルの間にブレイブバードの弱点を見抜かれたのかな?」

コトネ「はい。急に止まれないからその先に攻撃を展開しておけば勝手に突っ込んでくると思ったんです!」

ハヤト「何はともあれ、勝者の証のウイングバッジだ!」

コトネ「ウイングバッジ、ゲットって事ね!」

マリル『リルル』

ジム戦を終えたタクヤ一行は、ヒワダタウンにつながる繋がり洞窟に来ていた。

タクヤ「今日は何曜日だっけ?」

コトネ「多分金曜日だったはずよ」

カズナリ「それがどうしたんですか?」

タクヤ「いやー、保護されてるんだけど、ここは金曜日だけラプラスが見られるんだ」

コトネ「ラプラス!?!」

ラプラス 乗り物ポケモン。優しい 心の 持ち主。めったに 争わないため、沢山 捕まえられ 数が 減った。

カズナリ「ラプラスって、絶滅危惧のポケモンですよ?」

タクヤ「ああ。まあ、俺持ってるけど」

コトネ「ええっ！？どうして？」

タクヤ「まあ、研究職目指してるって言っただろ？その度の時にラプラス保護区に行ったんだけど、管理人と仲良くなってさ、卵をもらったんだ」

コトネ「いいな、ラプラス」

カズナリ「せめて見に行きましょうよ」

タクヤ「そだな」

つながりの洞窟を通るタクヤたちは、ラプラスを見に行くことになった。目指すは繋がり洞窟の最下層！

To Be Continued . . .

## Episode 11 ラプラスとロケット団！！

タクヤ「このあたりラプラスが見られるみたいだぞ」

「ここは繋がりの洞窟最下層。ラプラスが見られる場所については  
ずなんだけど……」

コトネ「いないみたいね……」

カズナリ「どうしてだろう……？」

タクヤ「看板もこうしてあるのに」

看板があり、そこには『毎週金曜日、ここにラプラスがやって来  
ます。保護区なので捕まえないようにしましょう』と書いてある。  
しかし、ラプラスがいないのだ。

タクヤ「ま、また今度見に来るか」

そんなことを呟いたとき、変な黒い服を着た二人組が話し合っ  
ていた。

黒A「ラプラスも捉えたし、ここに用はもう無いな」

黒B「そうだな。さつさとサカキ様にラプラスを渡そうぜ」

この二人組がラプラスを捕まえたようだ。二人組の近くに、大き  
なロボットがあった。

コトネ「ねえねえ、あの二人組が捕まえたんじゃないの？」ヒソヒソ  
カズナリ「そうですね。ラプラスを捉えたと言ってますし」ヒソ  
ヒソ



タクヤ「そつだな。俺が行くからお前らはここに隠れてる」「ヒソヒソ

そんなことを話し合っていたタクヤたち。しかし……

黒A「そこにいるのは誰だ!!」

黒B「我々の活動を見たからには、生きて帰れると思つなよ!!」

タクヤ「マズイ、バレた!クソツ、テメエら。ラプラスを放しやがれ!!」

黒A「誰が放すか!行けつ、クロバット!!」

黒B「そつだそつだ。こいつはサカキ様に渡すのだ!お前も行けつ、

マタドガス!」

クロバット「クロバット!!!!」

マタドガス「マタドガス!!」

タクヤ「行ってこい、ガブリアス、ハッサム!」

ガブリアス「ガブツ!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!」

二人組はクロバットとマタドガスを繰り出した。

タクヤ「テメエら、サカキって言ったな!?!ということはお前らは、ロケット団か!?!」

ロケット団A「バレちゃあしょうがない」

ロケット団B「そつ。俺たちはサカキ様のご命令でラプラスを捕まえに来たのだ!」

タクヤ「ほうほう、ロケット団か……。だったら手加減する必要はねえな!ガブリアス、二人組に向けて逆鱗!ハッサムはシザークロス!」

ロケット団A、B「は?」

ガブリアス「ガブガブガブツ!!!!!!!!!!」

ハッサム「ハッサム!!!!!!!!!!」

ロケット団A、B「ゲハッ!!」

クロバット「クロバット……」

マタドガス「ま、マアタドガアス……」

クロバットとマタドガスは隅っこでガクブル：（；。・。・）  
：していた。

ロケット団A「クソッ!!」

ロケット団B「こうなったら、マタドガス、煙幕!!」

しかしマタドガスは隅で震えていて何もできない。

タクヤ「さあ、覚悟はできてんだろおなあ？」

ロケット団A「すすすす、スイマセンっしたア!!」スライディング土下座

ロケット団B「ラプラスは逃がすので、開放してください!!」ジャンピング土下座

タクヤ「ふうん、じゃあ開放してやる……とでも言うと思ったかあ？ガブリアス、気絶させる!!」

ガブリアス「ガブッ!!!!」

ロケット団A、B「ゲハッ!!」

ロケット団の二人組は気絶してしまった。俺はバッグから穴抜けの紐を取り出し、二人を縛ったあと、ロボットを壊してラプラスを開放した。

ラプラス「キューン!!!!」

タクヤ「うお!!」

コトネ「うわー、ラプラスだー!!!!」

カズナリ「本物は初めて見ました!!」

ラプラス「キューン、キューン!!」  
タクヤ「やめろよラプラス!」

俺はラプラスにじゃれつかれていた。顔を舐められ、頬に頭をすり寄せられた。

タクヤ「ありがとう、ガブリアス、ハッサム。お前たちは戻れ!」

俺はガブリアスとハッサムをボールに戻した。

タクヤ「じゃあラプラス、俺たちはそろそろ行くよ」  
コトネ「そうね。私たちはヒワダタウンでジム戦しなきゃいけないしね」

カズナリ「そろそろ行きましようか」  
ラプラス「キューン、キューン……」

ラプラスは寂しそうにする。しかし保護区のポケモンは捕まえられないのだ。

タクヤ「ゴメンなラプラス。お前は保護区のポケモンだから捕まえたらいけないんだ。だけど、また会いに来るよ」

コトネ「そうね」  
カズナリ「そうですね」  
ラプラス「キューン?キューンキューン」

俺たちはラプラスに別れを告げ、ここを出ようとした。しかし……

タクヤ「ああ、この二人組とそいつらのポケモン忘れてた。おい、マタドガス、クロバット」  
マタドガス「クロバット……!!」  
『ビクッ』

タクヤ「そんなに怖がるな。お前たちはどうする？このまま野生に帰るか？」

コトネ「まあ、こんな奴らの手持ちのままより野生に帰ったほうが幸せじゃないの？」

カズナリ「そうですね」

マタドガス『マアタドガアス』スリスリ

コトネ「わっ！」

クロバット『クロバツ』スリスリ

カズナリ「うわっ！」

マタドガスはコトネに、クロバットはカズナリに擦り寄ってきた。

タクヤ「こいつら、お前らと一緒にいたいんじゃないか？」

マタドガス『マタドガアス！』コクコク

クロバット『クロバツ』コクコク

マタドガスとクロバットは頷く。

タクヤ「じゃあ、こいつらがもっているこれがこいつらのボールか。はい、コトネにはマタドガスのボール。カズナリにはクロバットのボールだ」

コトネ「マタドガス、ゲットって事ね！！」

カズナリ「クロバット、ゲットです！！」

マタドガス『マアタドガア！』

クロバット『クロツ、クロバツ！！』

コトネとカズナリはマタドガスとクロバットをゲットしたあと、ボールに戻した。

タクヤ「それじゃ、ヒワダタウンに行くか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

タクヤ「おっと、こいつらをヒワダのジュンサーさんに渡さないといけねえな」

俺は縛られたロケット団を担ぎ、歩きだした。

コトネ「よし、ジム戦頑張るぞー！ー！！」

タクヤ「オー！ー！！！！」

カズナリ「頑張ってください！！」

ラプラスをかけてロケット団と戦ったタクヤたちは、新たな仲間、マッドガスとクロバットを加え、次の街、ヒワダタウンに向けて歩きだした。

To Be Continued . . .

Episode 12 スピードボール！コトネ キリンリキゲットって事ね！

タクヤ「やっと抜けたー」

俺たちはやっと繋がりの洞窟を抜け、ヒワダタウンに来ていた。

タクヤ「よし、こいつらをジュンサーさんに引き渡すか」

コトネ「そうね」

カズナリ「そうですね」

そう、ラプラスの捕獲をしようとしていたロケット団員二人を引き渡すのだ。

タクヤ「ジュンサーさん！」

ジュンサー「どうしたの？」

タクヤ「こいつら、繋がりの洞窟のラプラス保護区でラプラスを捕まえようとしてたので捕まえました」

ジュンサー「あら、ありがとう。それで、ラプラスは？」

タクヤ「しっかり守りましたよ」

ジュンサー「そう。ご協力感謝します」

タクヤ「はい！」

俺たちはジュンサーさんにロケット団を引渡し、ポケモンセンタ―で一夜を過ごした。

次の朝、コトネがこんな提案をしてきた。

コトネ「ねえ、ボール職人のガンテツさんのところに行ってみない？」

カズナリ「いいね、それ」

タクヤ「そうだな。俺もぼんぐり渡しておきたいし」

俺たちはガンテツさんの工房に来た。

タクヤ「御免くださいーい！」

？「はい？」

タクヤ「おや、ガンテツさんですか？」

ガンテツ「いかにも。ボール作成の依頼かな？」

タクヤ「はい。えっと、この白ぼんぐりとみどぼんぐりで」

ガンテツ「ああ、たしかに受け取ったよ。明日にでも取りに来なさい」

タクヤ「はい」

コトネ「ねえねえ、ぼんぐりってどんなボールになるの？」

カズナリ「それは僕も気になります」

コトネとカズナリがそんなことを聞いてきた。

タクヤ「それは、白ぼんぐりが素早いポケモンを捕まえやすいスピードボール。きぼんぐりが月の石で進化するポケモンを捕まえやすいムーンボール。赤ぼんぐりがレベルの低いポケモンを捕まえやすいレベルボール。青ぼんぐりが釣ったポケモンを捕まえやすいルアーボール。みどぼんぐりが捕まえたいポケモンが懐きやすくなるフレンドボール。そして、黒ぼんぐりが体重の重いポケモンを捕まえやすいヘビーボールだ」

ガンテツ「よく知っているようじゃな。どうじゃ？これをあげよう。ひとり一個ずつヘビーボール、スピードボール、ルアーボールじゃ」

コトネ「じゃあ私スピードボール」

カズナリ「僕はルアーボールにします」

タクヤ「俺はヘビーボールで。ガンテツさん、ありがとうございます」

ガントツ「大事に使いなさい」  
コトネ「よし、早速ゲットしに行こう！」

コトネは走り出した。俺たちも追いかけていく。ついた先は、繋がり洞窟の出入口のすぐそこである、三十三番道路だ。

タクヤ「待てよコトネ！」  
カズナリ「待ってよー、ってうわっ！」

草むらから飛び出してきたのは、キリンリキだった。

コトネ「キリンリキだ！」

コトネは凶鑑を使う。

キリンリキ 首長ポケモン。尻尾にも 小さな 脳がある。 近寄ると 臭いに 反応して 噛み付いて くるので 注意。

タクヤ「本来三十三番道路には居ないはずなのに」

カズナリ「えっ！？そしたら誰かが捨てたポケモンだろうか」

コトネ「どっちでもいって事ね。行けっ、チコリータ！」

チコリータ『チッコ！』

キリンリキ『リキッ！』

キリンリキはダブルアタックを放つ。

コトネ「チコリータ、かわして葉っぱカッター」

チコリータ『チッコ！チッコ！』

キリンリキ『リキーーーーー！！！！！』



キリンリキは葉っぱカッターを受け倒れたが、再び立ち上がった。

タクヤ「いい根性だな」

カズナリ「キリンリキのスピードはなかなかなものです。これは注意が必要です」

コトネ「チコリータ、ツルの鞭で地面に叩きつけて!!」

チコリータ「チイツコー!!!」

キリンリキ「リツキー!!!リキ……リ……キ……」

コトネ「今よ、モンスターボール!」

モンスターボールにキリンリキが収まる。一回、二回と揺れ、スイッチが点滅する。しかし……

キリンリキ「リツキイ!」

コトネ「ああ!捕まえたと思ったのに!」

タクヤ「コトネ、さっき貰ったスピードボールを使い!」

コトネ「それがあった!行けっ、スピードボール!!」

今度はスピードボールにキリンリキが収まる。一回、二回、三回と揺れる。そしてパチンツ、と音が鳴り、完全にボールに収まった。

コトネ「ツツツ!キリンリキ、ゲットって事ね!!!」

チコリータ「チコリツ!チコ!!!」

タクヤ「ガンテツさんのボールはすごいだろ?」

カズナリ「ほんとにすごいよ。モンスターボールでダメだったのを捕まえるなんて」

コトネ「ありがとっ、チコリータ。よし、キリンリキも加えて、

ジム戦頑張るぞー!!!」

タクヤ「俺も頑張るぜ!!!」

コトネは、新たな仲間キリンリキを加え、手持ちポケモンは5体となった。次は、ヒワダジム。果たして、タクヤとコトネはジムリーダーに勝つことができるのか！

To Be Continued . . .

## Episode 13 ヒワダジム ヌケニンとタクヤー!

タクヤ「御免くださいーい!ジムリーダーのツクシさん、いますかー!?」

コトネ「ここが本当にジム?どちらかと言えば植物園のような感じがするんだけど」

カズナリ「ガイドブックには確かにここって書いてますね」

そう、ここはヒワダジム。だが内装は小さな植物園のような感じなのだ。

?「誰だい君たちは?」

タクヤ「挑戦者です。貴方はジムリーダーのツクシさん、ですね?」  
チャレンジャー

ツクシ「そうだよ。じゃあ、ジム戦ってことでいいんだね?」

コトネ「私も挑戦者です」  
チャレンジャー

ツクシ「そうか。だったらそちらが先にするか決めてくれるかな?」

タクヤ「コトネ、今回も俺が先に行っていいか?」

コトネ「いいよ、私があとでも」

ツクシ「じゃあ早速はじめようか」

いよいよ俺のジム戦。今回は3on3だが、一体で3タテするつもりだ。なぜなら、アイツを連れてきたからだ。

審判「それでは、ジムリーダーツクシ対、挑戦者タクヤのバトルを  
チャレンジャー  
始めます!道具の使用は禁止。使用ポケモンは3体。どちらかが3  
体全てを失ったところで終了とします!なお、交代は挑戦者のみ認  
チャレンジャー  
められます。それでは、始め!」

ツクシ「じゃあ僕から行くよ!行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士  
!」

イトマル『イトオ〜』

タクヤ「ツクシさん。悪いですが今回の勝負、俺のポケモンを一体も倒せずに終わるでしょう」

ツクシ「何を言ってるんだい？そんなわけ」

タクヤ「あるんですよ。虫ポケ使いである貴方なら、これが何かわかるでしょう？行けっ、俺の切り札っ！」

又ケニン『又ケ〜』

ツクシ「ッ!?そのポケモンは！」

タクヤ「そう、又ケニンですよ。俺の知る限り、あなたのポケモンはイトマル、トランセル、ストライク。だが、あなたのストライクは燕返しも、翼で打つも覚えていない。イトマルもトランセルもこいつを突破する技はない。貴方はもう詰んだんですよ」

ツクシ「たしかに、詰んだかもしれないね。だけど、勝負は最後までわからない！」

タクヤ「いいでしょう。いくぞ又ケニン！」

又ケニン『又ケ〜!』

審判「それでは、始めっ！」

その頃、コトネとカズナリは……

コトネ「何、あのポケモン!？」

カズナリ「あのポケモンって、もしかして……!？」

コトネは図鑑を取り出し、調べた。

又ケニン 抜け殻ポケモン。ツチニンの進化系。羽を動かさずに

飛んでいる 不思議なポケモン。背中の割れ目を覗くと魂を抜き取られるらしい。

コトネ「又ケニン?」

カズナリ「聞いたことがある。進化条件が特殊なツチニンの進化系がいるって。確かそのポケモンは、効果抜群以外の技は当たらない！」

コトネ「なにそれ！？そんなのって、反則じゃない！」

そんな又ケニン談義をする二人だった。

そして、タクヤとツクシのジム戦が始まった。

タクヤ「又ケニン、剣の舞からの身代わり！そして高速移動！」

又ケニン『又ケエエエエ！！！』

ツクシ「イトマル、糸を吐く！」

イトマル『イトオー！』

イトマルはこちらの素早さを下げようとする。だが……

タクヤ「又ケニン、かわして燕返し！」

又ケニン『又ケツ！又ケエ！』

ツクシ「速い！？かわして、イトマル！」

イトマル『イトツ！？イトオオオ！』

審判「イトマル、戦闘不能！又ケニンの勝ち！」

コトネ「一撃で相手を倒した！！！」

ツクシ「強いね、その又ケニンは。これは本当に詰んだかもしれないよ。僕はまだ、トランセルを信じている。進化すれば対抗できるからね。行けっ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」

トランセル『トランセルッ！！』

ツクシ「ひたすら固くなって耐えるんだ！」

タクヤ「固くなって耐える戦法か……。だが、物理防御を上げたところ、特殊技に効果はない！又ケニン、影分身からシャドーボール連弾！」

又ケニン『又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ又ケ！！！！！！』

トランセル『トランセツ!!!トラ……ン……セ……』  
審判「トランセル、戦闘不能!又ケニンの勝ち!」

さらに二体目を倒した。次はストライク。燕返しや翼で打つを途中で覚えることに注意すれば大丈夫だ。

コトネ「すごい!あつという間に二体倒しちゃった!」

カズナリ「おそらく、効果抜群の技を覚えるバタフリーに進化するまで耐えようとしたのでしょう」

ツクシ「このポケモンが途中で飛行タイプの技を覚えなかつたら完全に終わりだ!行けっ、華麗なる虫ポケモンの戦士!」

タクヤ「いよいよ切り札のお出ましか……。気をつける、又ケニン!」

又ケニン『又ケツ!』

ストライク『ストライツ!!!』

ツクシ「ストライク、影分身!」

ストライク『ストライツ!!!』

ストライクが何体にも増える。だが……

タクヤ「小細工は通用しねえんだよ。又ケニン、シャドークロー!」

又ケニン『又ケツ!!!』

ストライク『ストライツ!!!スト……ストライツ!』

タクヤ「まだ耐えるか……。だが、次で終わりだ!又ケニン、燕返し!」

ツクシ「ストライクっ!」

その時、ストライクの翼が光りだし、又ケニンに突進し始めた。

タクヤ「ここの土壇場で翼で打つを覚えるか……。構うな又ケニン

！そのまま突っ込め！」

ツクシ「ストライク、頑張って！翼で打つ！」

ストライク『ストライツ！！！！！！』

又ケニン『又ケエエエエ！！！！』

そこで、ストライクの翼で打つが、又ケニンに、ヒットした。

ツクシ「やった、又ケニンを倒した！」

だがそこで俺は、ニヤリと笑い、こう言った。

タクヤ「又ケニン、地中から燕返し！」

ツクシ「えっ！」

又ケニン『又ツケエ！』

ストライク『ストライツ！ス……ト……』

審判「ストライク、戦闘不能！又ケニンの勝ち！よって勝者、挑戦者タクヤ！」

ツクシ「なんで又ケニンは倒れていなかったんだい？」

タクヤ「俺の最初の支持を忘れたのかい？身代わりを使って、本体は穴を掘るを使わせていたんだよ」

ツクシ「そうだったんだ。戻れストライク、お前はよくやった。これが勝った証、インセクトバッジだ。大事にしてね」

タクヤ「おうよ。又ケニン、ありがとな」

俺は又ケニンに抱きつく。すると又ケニンは照れたように鳴いた。

コトネ「次はいよいよ私の番ね。よし、タクヤに負けなくらい頑張るぞ！」

見事、ジムリーダーツクシを下し、インセクトバッジを手に入れ

たタクヤ。次はコトネのジム戦。はてさて、どうなることやら。

T O B E C o n t i n u e d . . .



## Episode 14 コトネvsツクシ！ 激突ヒワダジム！！

ツクシ「さて、回復も終わったし、次はコトネ、君とのジム戦をはじめよう」

コトネ「はい！」

俺とのジム戦で傷ついたポケモンの回復も終わり、コトネとツクシのジム戦が始まるうとしていた。

タクヤ「コトネ、負けんじゃねえぞ」

カズナリ「頑張れ、コトネ」

コトネ「勿論！」

コイツの手持ちは最初に貰ったチコリータ、下から持ってたマリル、釣ったキングラー、繋がりの洞窟でロケット団が残したマタドガス、さっき捕まえたキリンリキだ。まあ、使用するのはマリル、キングラー、マタドガスあたりが定石だろう。

あ、勿論マタドガスとキリンリキは6vにしていますけどね。

審判「これより、ジムリーダーのツクシ対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは三体！どちらかが先にすべて失ったとき、バトル終了とします！ポケモンの交代は挑戦者のみとします！なお、道具の使用は認められません！」

ツクシ「まずは僕からだ。行けっ、虫ポケモンの静かなる戦士！」

イトマル「イトオ」

ツクシが出したのは、さっき使用したイトマル。対するコトネは、

コトネ「行けっ、キリンリキ」

キリンリキ『リキ〜!』

キリンリキだ。エスパーは虫に弱いのに。

タクヤ「キリンリキ!?!」

カズナリ「エスパータイプは虫に弱いはずなのに」

ツクシ「虫ポケモン相手にエスパーで来るなんて、どうかしてるよ」  
審判「それでは、始め!」

ツクシ「イトマル、糸を吐く!」

イトマル『イトオ!』

イトマルは糸を吐く。対するキリンリキは、

キリンリキ『リツキイ〜!』

コトネは技を知らないから指示をだし遅れている。しかしキリンリキは勝手に行動し、エスパーの力で糸を博を跳ね返した。って、あれは!?!

ツクシ「サイコキネシス!?!なんでそんな技を!?!」

イトマル『イ、イトオ……………』

ツクシ「ああッ、イトマル!」

イトマルは自分の糸を受けてしまった。

そしてコトネがキリンリキの使える技を調べると、サイコキネシス、噛み砕く、ダブルアタック、高速移動、シャドーボールと出てきた。なんとというオーバースペック。

コトネ「キリンリキ、噛み砕く!」

キリンリキ『リイツキイ〜!?!!』

キリンリキは後ろを向くと、しっぽの頭でイトマルに噛み付いた。イトマルは自分の糸のせいでかわせなかった。イトマルはそれだけで戦闘不能に陥った。

タクヤ「すげえ、コトネのキリンリキ」

カズナリ「噛み砕く一撃でイトマルを倒すなんて……」

ツクシ「ありがとうイトマル、ゆっくり休んで。コトネ、君はやるね。次はこいつだ、虫ポケモンの誇り高き戦士！」

トランセル『トランセルッ!!』

ツクシ「トランセル、固くなる。そこから体当たりだ！」

コトネ「かわして！」

トランセルは固くなって強度を上げる。そして、眼前から消え去った。

コトネ「消えた!？」

キリンリキ『リキッ!？リキリキ!？リッキィ〜!!』

消えたと思ったら後ろから体当たりを受け、キリンリキは吹っ飛んだ。

ツクシ「消えたんじゃないやなくて、スピードで攪乱しているだけだよ。

トランセル、連続で体当たり」

コトネ「戻ってキリンリキ」

ツクシ「いい判断だね。さて、次は何を出す？」

コトネ「行けっ、マタドガス！」

マタドガス『マアタドガア……』

タクヤ「あのマタドガス、どこまでやれるか見ものだな」

ロケット団が置いていったマタドガスだ。  
コトネは図鑑でマタドガスの技を調べた

マタドガス 使える技は、ダブルアタック、ヘドロ爆弾、大爆発、  
道連れ、毒々、シャドーボール、煙幕。

おおう、これもオーバースペック……

ツクシ「マタドガスか……。トランセル、また固くなるをして体当たり！」

トランセル「トランセツッ！」

コトネ「マタドガス、煙幕！」

マタドガス「マアタドガス」

ツクシ「煙幕か……。気をつける、トランセル」

コトネ「マタドガス、横回転しながらヘドロ爆弾」

ツクシ「何っ!？」

マタドガス「マアタドガス」

マタドガスは回転で発生した風圧で煙幕を吹き飛ばす。そこにあつたのはヘドロまみれのトランセルだった。

ツクシ「ああつ、トランセルっ!！」

審判「トランセル、戦闘不能!マタドガスの勝ち!」

コトネ「やったあ、マタドガスありがとう!」

マタドガス「マタドガス」

ツクシ「本当に君はすごいね。次はこいつ、倒せるかな?行けっ華麗なる虫ポケモンの戦士!」

ストライク「ストライツク!」

コトネ「一旦戻って、マタドガス。行けっ、キリンリキ!」

キリンリキ「リツキイ!」

コトネはマタドガスを戻し、キリンリキを繰り返した。

タクヤ「ストライクは強敵だぞ……」

カズナリ「いくらキリンリキでも勝てるかどうか……」

コトネ「キリンリキ、サイコネシス！」

キリンリキはサイコネシスを放つ。しかし……

ツクシ「影分身！そこから剣の舞から電光石火。そして連続斬り！  
ストライク『ストライツ』」

影分身でサイコネシスは不発に終わり、剣の舞で攻撃力を上げられてしまった。さらに電光石火で接近されて連続斬りをされまくる。

キリンリキ『リキッ、リキッ！』

タクヤ「連続斬りは当てる度に威力が上がる。さらにストライクの特性テクニシャンで威力が上がっている。これは戦闘不能だな」

思ったとおり、キリンリキは戦闘不能となってしまった。

コトネ「次、行けっマリル！」

マリル『リルル〜』

ツクシ「このまま押し切るよ、電光石火から連続斬り！」

マリルも同じく連撃を受ける。

タクヤ「同じ手にはまってどうするんだ！」

カズナリ「マリルが危ない！」

コトネ「マリル、水鉄砲！」  
マリル『リルッ、リルッ』

しかし連撃から抜け出せないマリルは、攻撃できない。

コトネ「マリル、抜け出して！」

マリル『リルウ……………』

コトネ「ああっ、マリル！」

マリルも戦闘不能になってしまった。絶体絶命の大ピンチである。

ツクシ「さて、君の最後のポケモンはマタドガスだ。さて、どうする？」

絶体絶命の大ピンチのコトネ。残されるポケモンは一体ずつ。ツクシはストライク。コトネはマタドガス。どちらも危うい状況になってきた。

タクヤ「ツクシはストライク一体。対するコトネはマタドガス一体。こりゃどちらも後がねえな」  
カズナリ「コトネ、頑張れ！」  
コトネ「行けっ、マタドガス！」  
マタドガス『マアタドガア』

コトネは最後のポケモン、マタドガスを繰り出した。

コトネ「マタドガス、シャドーボール！」  
マタドガス『ドガア！』

ツクシ「ストライク、切り裂くでシャドーボールを斬れ！」  
ストライク『ストライツ！』

なんとストライクは、飛び上がってシャドーボールをまっぴたつに斬ってしまった。

コトネ「シャドーボールを斬った!? マタドガス、煙幕！」  
マタドガス「ドガアアアアア……」

煙幕で辺りが多い尽くされる。だが、ツクシは同様を見せなかった。

ツクシ「剣の舞で吹き飛ばせ！」  
ストライク「ストライク！」

ストライクは高速回転し、巻き起こった風で煙幕を吹き飛ばしてしまう。

コトネ「マタドガス、上昇して！」  
ツクシ「追え、ストライク！翼で打つ！」

マタドガスは上昇したが、ストライクのほうが速かった。ストライクも飛び上がり、強烈な翼で打つで迎撃されてしまった。

コトネ「もう打つ手はないの……?」

コトネが崩れ落ちそうになったとき、マタドガスの口から炎が上がり始めた。

タクヤ「あれは、火炎放射!? しかもかなり強力そうな感じだぞ!」

コトネ「マタドガス。あなた火炎放射を覚えたのね！」

マタドガス『ドガアアアアアア！！！』

ドガースは火炎放射を発射した。しかも、上空からフィールド全体に降り注ぐように。

ストライク『ス、スト……』

ツクシ『ああつ、ストライク！』

ストライクは上空から降り注ぐ火炎放射を被弾してしまい、黒こげになっつて倒れてしまった。

審判「ストライク、戦闘不能！マタドガスの勝ち！よって勝者、挑<sup>チャ</sup>戦者コトネ！」

コトネ「やった、勝ったー！！ありがとうマタドガス！！！」

マタドガス『／／／』

ツクシ「すごかったよ君のマタドガス。まさかあそこで火炎放射を覚えるなんて。しかも普通の火炎放射なら対抗策はあったんだけど、上から降ってくるのは防ぎ様がなかったよ。はい、インセクトバツジ」

コトネ「インセクトバツジ、ゲットって事ね！！」

マタドガス『マアタドガース！』

見事ヒワダジム、ジムリーダーのツクシに勝利したコトネ。次のジムに向けて、タクヤたちの旅はまだまだ続く。

To Be Continued . . .



**Episode 15 到着コガネシティ！ ドククラゲとカズナリ！！（前書き**

「Episode 14 コトネvsツクシ！ 激突ヒワダジム！！」

の内容を少し変更させていただきました

ぜひ読んでみてください

## Episode 15 到着コガネシティ！ ドククラゲとカズナリ！！

ヒワダのジム戦も終わり、コガネシティに向かっている途中、一成のポケギアに電話が掛かってきた。

カズナリ「もしもし」

？「もしもし、カズナリか？」

カズナリ「父さん？どうしたの？」

カズナリ父「次のジョウトフェスタの場所が決まったよ。シンオウ地方だ」

カズナリ「ジョウトフェスタの？わかった。どこで待ち合わせ？」

カズナリ父「お前は今どこにいる？」

カズナリ「コガネシティに向かっている途中。もうすぐコガネシティにつくよ」

カズナリ父「ちょうど良かった。今コガネシティにいるんだ。デパートの屋上に来てくれ」

カズナリ「うん、わかったよ。それじゃあ」

カズナリの電話も終わり、再び歩きだした。

タクヤ「そうだ、カズナリ。ジョウトフェスタって？」

俺は死ぬ前にアニメを観て知っているが、聞いたとかないと怪しまれそうなので一応聞いておいた。

コトネ「私たち、各地でジョウトをPRしてるの」

カズナリ「そう。今回の行き先はシンオウ地方ってわけ」

タクヤ「そうか。俺も行ってえな、シンオウ地方」

コトネ「私たちについてくれば？」

タクヤ「いいのか？まあ、ダメだつっても俺のプテラやボーマンダに乗って行こうと思ってるけど」

カズナリ「まあ、父さんに聞いてみるよ」

タクヤ「さんきゅー」

コトネ「それじゃ、さつさとコガネシティに行きましょう」

タクヤ「カズナリ、ああ（うん）」

そんなことを話しながら、コガネシティに向かった。

タクヤ「ここがコガネシティか……。ジム戦どうする？」

カズナリ「帰ってきてからでいいよ」

コトネ「そうね。さつさとデパートに行きましょう」

タクヤ「おう。っと、その前に手持ち変更しておこうかな。シンオウに俺に相対できるトレーナーがいなか探してみたいから本気の手持ちで行かせてもらおうよ」

コトネ「タクヤの本気の手持ち！？見てみたい！」

カズナリ「僕も興味あるよ」

俺は転送装置を取り出し、手持ちをテッカニン、メタグロス、ポーマンダ、スターミー、ドサイドン、ゲンガーに変更した。

カズナリ「強そうなポケモンばかりですね」

コトネ「強くなったらこのポケモンたちとバトルしてみたいな」

タクヤ「おう、待ってるぜ」

そんな話をしているうちに、デパートの屋上についたみたいだ。そこにはカズナリに少し似た感じのオジサンがいた。

カズナリ「父さん」

カズナリ父「カズナリ、コトネ、久しぶりだね。そちらの人は？」

タクヤ「ああ、俺、タクヤです。カズナリ、コトネと一緒に旅させてもらってる者です」

カズナリ父「そうか。うちのカズナリがお世話になってるみたいだね。そしてカズナリ、旅の調子は？」

カズナリ「タクヤさんがベテランだから色々教えてもらってるよ」

カズナリ父「そうか」

コトネ「おじさん、ジヨウトフェスタ、タクヤも連れていっていいですか？」

カズナリ父「もちろんだよ。よろしく、タクヤ君」

タクヤ「はい、よろしくお願いします。出発はいつになるんですか？」

カズナリ「明日の早朝からだよ。コガネシティの西の海岸に飛行場があるから、そこから出る飛行艇でシンオウに行く」

タクヤ「そつすか。じゃあ、俺ちよつと外行つてきますんで、用があれば俺のポケギアに電話してください」

そう言つて、カズナリの父さんのポケギアに、俺のを登録しておいた。

俺はデパートから外に出て、釣りを始めた。

タクヤ「シンオウでジヨウトフェスタ、か。サトシとバトルしてえな……」

そんなことを呟く俺。やっぱり光厨ヒカチュウ使いと名高いサトシとポケモンバトルをするのは、俺の夢だったのである。

そんなこんなで、釣竿にポケモンがかかったようである。

タクヤ「さつて、何が連れたかなつと」

俺は思い切り釣竿を引いた。そこにかかっていたのは、ドククラ

ゲであった。

ドククラゲ『ドクドク……』

タクヤ「ドククラゲか……。よしっ行け、ボーマンダ！」

ボーマンダ『マンダ！』

タクヤ「まずは、ドラゴンクロー！」

ボーマンダ『マンダ！』

ボーマンダの、竜の力を込めた爪による一撃が放たれ、ドククラゲにクリーンヒット。吹っ飛ばされたが、ドククラゲは触手を集め、冷気の力を込め始めた。

タクヤ「不味っ、冷凍ビームか！ボーマンダ、急上昇！」

ボーマンダ『マンダ！マンダ！』

ドククラゲ『ドー、クー……！』

ボーマンダは間一髪避ける。長期戦は危険だな。

そんな時、ポケギアに電話が掛かってくる。

タクヤ「こんな時にかよ！ボーマンダ、思念の頭突き！もしもし？」

ボーマンダ『マンダ……！』

カズナリ「もしもしタクヤさん？ちょっといいですか？」

タクヤ「悪い、今取り込み中だ。これ見りゃわかるだろ？」

俺はポケギアのカメラ部分をドククラゲとボーマンダに向ける。そこにはボーマンダの思念の頭突きがドククラゲに直撃するところだった。

カズナリ「ドククラゲ！？釣りでもしてたんですか！？」

タクヤ「ああ！ボーマンダ、噛み砕く！」

ボーマンダ『マンダ!』

ボーマンダはドククラゲに噛み付いた。ドククラゲは痛み、そのまま冷凍ビームをはなとうとする。

タクヤ「ボーマンダ、急上昇して上空からドククラゲを地面に叩きつける!カズナリ、後でかけ直す」

カズナリ「わかりました。それじゃあ」

カズナリからの通話を切り、バトルに専念する。ドククラゲは地面に叩きつけられ、目を回していた。

タクヤ「ボーマンダ、もういい戻れ。行けっ、モンスターボール!」

ボーマンダをボールに戻し、ドククラゲに向かってボールを投げる。一回、二回、三回とボールが揺れる。そしてパチンと音が鳴ると、ドククラゲがボールに収まった。

タクヤ「ドククラゲ、ゲット!」

ドククラゲをゲットしたが転送せず、ボールを手にもっている。そして、カズナリに電話をかけ直した。

タクヤ「カズナリ?」

カズナリ「ああ、ドククラゲどうしましたか?」

タクヤ「捕まえたよ。まだ転送せず、ボールは手に持ってるけどね。ほら」

と言ってドククラゲのボールをカズナリに見せた。カズナリはうわあ、と言って、次に本題に入り出した。

カズナリ「今日の夜、ポケモンセンターのバトルフィールドで、バトルしてください」

タクヤ「はあ？ま、まあいいけど。用件はそれだけ？」

カズナリ「はい」

タクヤ「おK。じゃ、またそっちに向かうわ」

と言ってポケギアの電話を切り、デパートの屋上に再び向かった。

タクヤ「ただいま戻りました」

カズナリ父「お疲れ。さつきドククラゲを捕まえたんだって？」

タクヤ「はい。ああ、そのことですが、カズナリ、お前にこのドククラゲ、やるよ」

カズナリ「えっ？」

タクヤ「俺ドククラゲ持つてるんだわ。だから、コトネより手持ちの少ないお前にと考えてね」

そう。今の二人の手持ちは、コトネがチコリータ、キングラー、キリンリキ、マリル、マタドガスの五体。対するカズナリはワニノコ、ゴース、クロバットの三体なのだ。三体じゃ新人として危なっかしい。だからカズナリにあげようというのだ。

タクヤ「と言っても、ドククラゲを加えてもコトネより一体手持ちが少ないんだけどね」

カズナリ「あ、ありがとうございます！」

コトネ「いいなー、カズナリ。まっ、よかったじゃん」

カズナリ父「うちのカズナリのために、ありがとうございますタクヤ君」

タクヤ「どういたしまして。じゃ、夜のバトル楽しみにしてるよ、カズナリ。俺はまあ本気は出さない、というより出せないんだけどね」

カズナリ「はい！」

こうして、カズナリの父さんはホテルへ、俺たち三人はポケモンセンターで部屋をとっておいた。

いよいよ夜には、カズナリとのバトルだ。

T o B e C o n t i n u e d . . .



Episode 16 3on3 タクヤvsカズナリ！！

ここはポケモンセンターのバトルフィールド。そこには、俺とカズナリが向き合っていた。

俺の手持ちは全てジョーイさんに預け、カズナリのような対新人用の手持ちに変更していた。

タクヤ「それじゃ、カズナリ。3on3でいいな？」

カズナリ「はい！」

タクヤ「カズナリの父さんは審判を頼みます」

カズナリ父「わかったよ」

コトネ「どっちも頑張れ！」

俺、カズナリはそれぞれの位置につく。そして、俺はお互いの手持ちを考えていた。

タクヤ（カズナリの手持ちはワニノコ、クロバット、ゴース、そして俺のあげたドククラゲ。ゴース以外は電気に弱い。そして俺のあげたドククラゲはほぼ確実に使ってくると見ていい。そして、ドククラゲは水タイプだからワニノコを使ってくる確率は格段に下がる。よってカズナリの手持ちはクロバット、ゴース、ドククラゲの確率が一番高い。そして俺の手持ち、まず電気タイプの対新人用ポケモン、ルクシオ。これは生前レントラーを育てていた途中のものだ。そして次にゴルバット。最後にユンゲラーだ。どれも最終進化ではないから対新人にはもってこいだ。さて、どうするカズナリ？）

そんな考え事をしてる間に、カズナリの父さんの声が響く。

カズナリ父「それではこれより、カズナリ対タクヤのバトルを行う

！使用ポケモンは三体で交換は自由。どちらかのポケモンがすべて失われたときに試合終了とする。なお、道具の使用は認められない！」

タクヤ「まずはこいつからだ！行けっ、ルクシオ！」

ルクシオ「シオッ！」

コトネ「ルクシオ？」

コトネとカズナリは図鑑を使う。

ルクシオ 電光ポケモン。コリンクの進化系。仲間と尻尾を繋げると、より強力な電撃を爪から出すことができる。

カズナリ「やっぱり電気タイプか。ゴース、お願いします！」

ゴース「ゴースゴス！」

ルクシオ「グルルルrrr……」

ゴース「ゴ……ゴース……」

やはりゴースを使ってくるか……。そして、ルクシオの特性威嚇も発動した。さて、何を覚えている？

カズナリ父「先行はカズナリ。それではバトル、スタート！」

カズナリ「行くぞ、ゴース！シャドーボール！」

ゴース「ゴース……！」

タクヤ「ルクシオ、かわして威張れ！」

ルクシオ「シオー……ッ！」ドヤア

ゴース「ゴ……ゴ……？ゴ……ゴ……ゴース！」

カズナリ「ゴース、正気に戻って！ゴース！シャドーボール！」

ゴースは混乱してしまい、自分を攻撃したり、変な行動をとってしまう。

タクヤ「ルクシオ、噛みつく！」

ルクシオ『シオッ！』

カズナリ「かわして、ゴース！」

やっと正気に戻ったゴースは、ギリギリのところでもかわす。

タクヤ「ルクシオ、そのままアイアンテール！」

ルクシオ『シオーーーーーッ！！！！』

カズナリ「ゴース、交わして目覚めるパワー！」

ゴース『ゴース！！！！』

アイアンテールを不規則な動きでかわし、目覚めるパワーをルクシオに当てた。ゴースは6vだから目覚めるパワーのタイプは悪だ。

タクヤ「そいつの目覚めるパワー、なかなかの威力のようだな。ル

クシオ、雷の牙！」

ルクシオ『シオッ！』

ゴース『ゴースッ！！！！！！』

雷の牙がクリーンヒット！ゴースは痛がる。そしてルクシオが離れると、ゴースは力なく倒れる。だが、

カズナリ「ゴ、ゴースが光ってる！？」

コトネ「あれは！」

タクヤ「進化の光か！」

もともと捕まえた時のレベルがそこそこあったようで、進化してしまっただ。



「クロバット、お願いします」  
「タクヤ「来たな、クロバット！」」

自分の進化系を見たせいか、ゴルバットは少し身震いした。

カズナリ「クロバット、噛み付く！」

タクヤ「ゴルバット、かわして蜻蛉返し！」

クロバットは持ち前のスピードを生かして接近し、噛み付こうとする。だがゴルバットはギリギリかわして蜻蛉返しを決めた。

タクヤ「よし、サンキューゴルバット。ユンゲラー、頼んだ！」

ユンゲラー「ユン、ゲラー……」

カズナリ「なつ、ポケモンが交代した!？」

コトネ「何で!？」

タクヤ「蜻蛉返しは攻撃の後にポケモンを交代できるんだよ。ユンゲラー、サイコキネシス！」

ユンゲラーはサイコキネシスでクロバットを捕まえる。効果は抜群なので、クロバットはとても苦しんでいるようだ。

カズナリ「抜け出して、クロバット！」

タクヤ「無駄だ! ユンゲラー、思いっきり地面に叩きつける！」

ユンゲラー「ユンゲラアアア! ! ! !」

クロバット「クロバット! ク、クロオ……」

その一撃で、クロバットはフラフラになって、飛んでいるのがやっとだった。

カズナリ「クロバット、せめて一撃だけでも! エアスラッシュ！」

タクヤ「ユンゲラー、テレポートでかわしてサイケ光線で止め！」

クロバットのエアスラッシュをユンゲラーはテレポートしようとした。だが、スピードの問題でテレポートを使う前に当たってしまい、怯んだ。

カズナリ「よし、怯んだ！もう一回！」

タクヤ「テレポートでかわせ！そしてサイケ光線！」

またクロバットのエアスラッシュが当たり、怯む。

カズナリ「もう一回！」

タクヤ「サイケ光線！」

またエアスラッシュが当たる。しかし今度は怯まず、サイケ光線がクロバットに当たり、倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、戦闘不能」

ユンゲラー「ユ、ユンゲ、ラァ……」

なんと、ユンゲラーも倒れてしまった。

カズナリ父「クロバット、ユンゲラー、両者戦闘不能！」

そしてお互いのポケモンはあと一体。カズナリはおそらくドククラゲだろう。そしてこっちはゴルバット。お互い勝負はわからなくなってきた。

タクヤ「行けっ、ゴルバット！」

ゴルバット『ゴルバット！』

カズナリ「ワニノコ、お願いします!」

ワニノコ「ワニワニワニ!!!」

タクヤ「なっ、ワニノコ!? ドククラゲを使うかと思ってたぞ」

カズナリ「ワニノコ、アクアテール!」

ワニノコ「ワニワー!!!」

タクヤ「かわせ、ゴルバット! 怒りの前歯!」

ゴルバット「ゴル、バツ!!!」

ワニノコ「ワニワー! ワニツ!!!」

ゴルバットはアクアテールをかわし、ワニノコに怒りの前歯がヒツトする。

カズナリ「水鉄砲!」

ワニノコ「ワーニヤー!!!」

タクヤ「翼で打つで打ち返せ!」

ゴルバット「ゴル、ゴルバツ!!!」

カズナリ「ワニノコ、かわしてアクアテール!」

タクヤ「ゴルバット、ギガドレイン!」

ワニノコ「ワニワニツ!!!」

ゴルバット「ゴルバツ! ゴルゴル、ゴルバツ!!!」

タクヤ「カズナリ! 行つけええええええええええええええええええ!!!」

「!!!!」

ドオオオオオオオオン!!!!!! という大きな爆発が巻き起こる。そして、そこには、

ゴルバット「ゴルバツ!!!」

ゴルバットが悠然と翔いていた。

カズナリ父「ワニノコ、戦闘不能！ゴルバットの勝ち！よって勝者、タクヤ！」

タクヤ「サンキューゴルバット。ゆっくり休め。カズナリ、すごかったぞ」

カズナリ「はい、ありがとうございます。結局負けてしまいましたけど」

コトネ「カズナリすごい！」

カズナリ父「タクヤ君。君はすごいね。それにカズナリもすごかったぞ」

俺とカズナリのバトルも終わり、俺の対新人用ポケモンは軽い処置をして家に送り、あとの治療はメイドに任せた。いよいよ明日はシンオウに出発する日。カズナリの父さんはホテルに、俺たちはポケモンセンターの自室に戻り、明日に備えてゆっくり休むことにした。

To Be Continued . . .



## Setup 2 メイド / コトネ / カズナリ (前書き)

今回はタクヤのメイドとこの世界のコトネ&カズナリの設定を発表  
します

## Setup2 メイド / コトネ / カズナリ

〈名前〉

不明 基本、メイドと呼ばれる  
今後名前を公開するかは不定

〈姿 / 服装〉

髪は金髪に腰まである長髪  
顔は普通に綺麗

身長は162くらいで、スリーサイズは上からきゅ「秘密です」  
はあと(「

服装は基本メイド服

〈人物〉

優しく温厚な性格  
案外ノリのいい人柄  
年は20くらい(見た感じ)

〈ポケモン〉

タクヤのポケモンの預かり役兼世話役

〈その他〉

タクヤがいない間の家のことや、タクヤの世話をするために使わ  
されたメイド

神様曰く、「性欲処 役として使ってもいい」とのことで、本人  
も了承

〈名前〉

コトネ

〈姿、服装〉

アニメとすべて同じ

〈人物〉

アニメと全て同じ

〈ポケモン〉

チコリータ、マリル、キリンリキはアニメと同じ  
キングラーとマタドガスの二体がアニメと違う

〈名前〉

カズナリ

〈姿、服装〉

アニメとすべて同じ

〈人物〉

アニメと全て同じ

〈ポケモン〉

アニメと同じなのはワニノコ

ゴースト、ゴースト、クロバット、ドククラゲの三体がアニメと違う  
なお、アニメ通りフカマルはゲットする予定

## Episode 17 シンオウ上陸！ ジョウトフェスタ！！

タクヤ「シンオウか……。本気の俺に相対できるトレーナーいな  
かな」

ここはシンオウ地方行きの飛行艇。シンオウでジョウトフェスタ  
を開くために俺たちはシンオウに向かっているのだ。

コトネ「ねえおじさん。今回のシヨ一の賞品は？」

カズナリ父「ポケモンの卵だよ」

と言つてカズナリの父さんは孵卵器に入つた卵を取り出した。

タクヤ「コトネ、シヨ一って何をするんだ？」

コトネ「ジョウトの新人用ポケモンのチコリータ、ワニノコ、ヒノ  
アラシと、各地の新人用ポケモンのバトルよ。勝てば賞品として卵  
を渡すの」

タクヤ「シンオウつつーとナエトル、ポツチャマ、ヒコザルだな」

コトネ「シンオウ地方のポケモン見の楽しみだな」

カズナリ「僕も楽しみだな」

カズナリ父「そろそろ着くみたいだよ」

タクヤ「ああ、楽しみだなー！」

いざ、シンオウ上陸！

タクヤ「シンオウ上陸だー！！！」

カズナリ父「今からフェスタの準備をするから、カズナリたちはそ  
のへんを見てきてもいいよ」

カズナリ「僕も手伝うよ。コトネたちで行ってきて」

タクヤ「俺、ちょっとナナカマド博士に会ってくるよ。大丈夫、フエスタは明日からだろ？すぐもどるから」  
コトネ「ちよつとタクヤ!？」

俺は返答も聞かず、ボーマンダを出して飛び去った。

タクヤ「ボーマンダ、この、マサゴタウンってどこまで頼む」  
ボーマンダ『マンダッ!』

そう言っつてポケギアのマップ機能を使っつてボーマンダに教える。するとボーマンダはハイスピードで飛び始めた。

一方コトネたちはというと……

コトネ「いいなー、私もナナカマド博士と会っつてみたいなあ」  
カズナリ「でもタクヤさん、ボーマンダに乗っつてすごいスピードで飛んでいったよ」

カズナリ父「確かにあのスピードは、良く育てられているよ」

そんな風にタクヤについての話で盛り上がっていた。

そして1時間半後。タクヤとボーマンダはもうマサゴタウンの研究所前に来ていた。

タクヤ「御免くださいーい!」

ボーマンダ『マンダッ!』

?「はい?」

タクヤ「ああ、ここの研究員さんですか?俺はトレーナーのタクヤです。ナナカマド博士に会いたいのですが」

研究員「ああ、ナナカマド博士なら中に。どうぞ入ってください」

タクヤ「ありがとうございます。ボーマンダ、お前は戻っててくれ」

ボーマンダをボールに戻し、ナナカマド研究所に入る。見渡せばいろんな機械があり、そこにナナカマド博士がいた。俺の方をふと見ると、興味深そうに眺めてきた。

ナナカマド「おや、お前さんは？」

タクヤ「俺、ジョウトのトレーナーのタクヤって言います。せつかくシンオウに来たので、研究者の権威であるナナカマド博士に一目お会いしたいと思いましたので」

ナナカマド「そうか、ジョウトのトレーナーか」

タクヤ「俺、聞きたいことがあるんですよ。どこかに強いトレーナーはいませんか？」

ナナカマド「ふむう、強いトレーナーか。というとシンジ君や、カントーのマサラタウンから来たというサトシ君だろうか？」

タクヤ「サトシ君って、カントーリーグ、ジョウトリーグ、ホウエーリーグにも出場していたあのサトシ君ですか？」

ナナカマド「そうじゃな」

タクヤ「ありがとうございます。じゃあ、俺は先を急ぐのでこれで」

ナナカマド「もしもサトシ君に会ったらよろしく伝えてくれ」

タクヤ「はい！いくぞボーマンダ！」

俺は再びボーマンダを出し、飛び立つ。ボーマンダも疲れてきたのか、さっきより遅く、2時間くらいでコトネたちのところに着いた。

タクヤ「ただいまー！」

ボーマンダ『マンダッ！』

コトネ「もう、いきなり飛び立つんだから。で、ナナカマド博士はどうだった？」

カズナリ「それは僕も気になります」

俺はさっきナナカマド博士と話した強いトレーナーのことを話した。まあ、実名は出さなかったけど。

コトネ「へー、会ってみたいなー」

カズナリ「そうだね」

タクヤ「それじゃあ、この地方で何が釣れるのか、釣りしてこようかな」

コトネ「あつ、私も行く！」

カズナリ父「行ってらっしゃい」

カズナリ「僕はこっちを手伝ってます」

そして、近くを流れる小川で……

タクヤ「何が釣れるかな？」

コトネ「まっ、楽しみってことね」

マリル『リルル〜』

コトネはいつの間にかマリルを出していた。



30分後

タクヤ「釣れねえな」

コトネ「釣れないね」

そんなことを呟きながら釣りを続ける二人。

タクヤ「はあ……」

コトネ「釣れない……」

さらに30分後

タクヤ「釣れない」

コトネ「うん」

まだ釣れない。

またもや30分後

タクヤ「釣れねえ」

結局その日は何も釣れずに、俺たちはポケモンセンターでポケモンを回復し、ホテルで一日を終えた。

To Be Continued . . .

Episode 18 ジョウトフェスタ in シンオウ!!

コトネ「マリル〜？マリル〜！？」  
タクヤ「はあ、またか」

今、シンオウ地方ではジョウトフェスタが開催されている。そして、そのスタッフであるコトネと、そのコトネ一緒に旅する俺は、コトネのマリルを探していた。

タクヤ「俺、ちつと向こう探してくるから」  
コトネ「うん。じゃあ私はこっち」

俺たちはそれぞれ違う方向を探しに行く。そして、俺の走る目の前にあつたのは、まさにサトシのピカチュウとヒカリのポッチャマがマリルを引き抜いているところだった。

タクヤ「あー、そのマリル……」  
ヒカリ「このマリル、あなたの？」  
タクヤ「ああ、違うよ。俺と一緒に旅してるトレーナーのポケモンだよ。いつもすぐいなくなるんだ」  
コトネ「タクヤー！あつ、いたいた」  
マリル『リルー！』  
タクヤ「おう、コトネ」

コトネはマリルをボールに戻し、自己紹介を始めた。

コトネ「私、トレーナーのコトネ」  
タクヤ「俺はタクヤだ。まあ、16歳だけどあんま気遣わなくていいよ」

コトネ「あなたたちは？」

コトネはサトシたちに話す。

タクヤ「確か、こつちがカントー、ジョウト、ホウエンの三地方のリーグに出場してたサトシ君じゃないか？俺、テレビ見てたんだ」

サトシ「俺のこと知ってるんですか？」

タクヤ「まあな。で、こつちはカントーはニビシティの元ジムリーダーのタケシ君じゃないか」

タケシ「俺のことも知ってるんですか？」

タクヤ「ま、ジムリーダーとなると何かと有名だろ？で、こつちは？」

俺は、ヒカリについて聞いてみる。もちろん知っているが、怪しまれるだけだ。

ヒカリ「あたしはヒカリ。この子はパートナーのポッチャマ」

ポッチャマ「ポッチャマ！」

サトシ「さつきタクヤさんが言ったけど、俺はサトシ。こつちが相棒のピカチュウ」

ピカチュウ「ピッカッチュウ」

タケシ「俺もタクヤさんが言ってたけど、タケシだ。元ニビジムリーダーの今はブリーダーなんだ」

コトネ「ま、よろしくって事ね」

タクヤ「よろしくな」

コトネ「ふーん、ポッチャマかー」

コトネは図鑑を取り出して調べた。

ポッチャマ ペンギンポケモン。歩くのは苦手で転けたりするが、

プライドは高く堂々と胸を張る。

ヒカリ「それってポケモン図鑑!？」

コトネ「そ、ジョウトじゃこれが最新型なんだ」

サトシ「ジョウトか、懐かしいな」

タクヤ「そうか、サトシ君はジョウトリーグに出場経験があるから、旅したことがあるんだね？」

サトシ「はい」

タクヤ「そだ、コトネ。アレに連れてってやるうぜ」

コトネ「おっ、いいね。面白いとこに連れてってあげる」

そう、ジョウトフェスタに連れてってあげるのだ。

ヒカリ「面白いとこ?」

タクヤ「あっちの広場でジョウトのフェスタやってんだ」

サトシ「フェスタ?」

コトネ「来ればわかるって。さ、行こうよヒカリン」

パチン、とウィンクをして、いつものあだ名癖でヒカリちゃんを呼ぶ。

ヒカリ「ひ、ヒカリン?」

タクヤ「悪いな、こいつの悪い癖だ。ま、行こうぜサトシ君、タケシ君、ヒカリちゃん」

そういつて俺は三人を引き連れて広場に戻っていった。

ヒカリ「うわあ」

サトシ「スゲエ」

サトシとヒカリは驚く。結構大きなフェスタだから、驚いてもしょうがない。

そのとき、ピリリリ、ピリリリ、とコトネのポケギアが鳴った。コトネはポケギアを取り出すと、サトシが頭にハテナを浮かべながら聞いてきた。

サトシ「それって？」

コトネ「ポケギアよ。電話とか地図とか、いろんな機能がついてるの」  
タクヤ「俺も持ってるし」

俺もポケギアを取り出してみせる。コトネは電話に出る。相手はカズナリだった。

コトネ「もしもし？」

カズナリ「コトネ？今どこにいるんだよ？あとタクヤさんも」

コトネ「タクヤは一緒にいるよ。今すぐもどるから」

コトネは電話を切り、俺達二人はサトシたちに向き直った。

タクヤ「これがジョウトフェスタだ」

コトネ「私たち、このフェスタをあちこちの地方でやって、ジョウトをPRしてるの」

サトシ、ヒカリ、タクシ「へえ」

そのとき、モニターに映像が写った。コトネ出演のPVのようだ。

PVコトネ「皆さん、こんにちは」

ヒカリ「ああ、あれって！」

サトシ「コトネじゃないか！」

PVにコトネが映っているのを見て、サトシたちも驚く。

タケシ「へー、二人はこのフェスタのスタッフなのか」

コトネ「あはははは、まあね／＼／＼ あんなのもやってるって事ね／＼／」

タクヤ「まあ俺は飛び入りみたいなものだけだな」

一時PVを見てみると、タケシがエンジユの舞子さんを見て「舞妓はああん」と悶えながら言っていたりした。

そして俺たちはカズナリの父さんが担当しているコーナーに戻ってきた。

カズナリ父「ジョウト名物ポンドリンクに、モーモーミルクが試飲できますよ」

カズナリ「さあ、どうぞどうぞ！」

コトネ「おまたせー！」

タクヤ「すみません、遅くなりました」

カズナリ「コトネ、タクヤさん」

サトシ「こんにちは」

カズナリ父「ようこそ、ジョウトフェスタへ」

ヒカリはカズナリのワニノコを見つけて、図鑑を取り出した。

ワニノコ 大顎ポケモン。発達した顎を持ち、何にでも噛み付く習性があるので、トレーナーも注意が必要。

ピカチュウ『ピッカ！』

ポッチャマ『ポチャ！』



ピカチュウとポツチャマがワニノコに挨拶する。だが、一睨みして『ワニヤ!』、とそっぽをむいた。

ヒカリ「このワニノコ、ずいぶんクールね」

カズナリ「僕のワニノコなんだ。いつもこうだよ。それに、僕の作ったポケモンフーズは、あんまり食べなくて」

そう言うと、タケシはポケモンフーズを一粒取りサクツ、と子気味いい音を立てて少し齧る。そして、

タケシ「渋味が足りないみたいだな。カゴの実はあるかい？」

カズナリ「えっ？」

一成は疑問符を浮かべてカゴの実を取り出した。タケシはそれを磨り潰して粉末状にし、ポケモンフーズに振り掛けてワニノコの前に出した。

タケシ「さあどうぞ」

ワニノコ『ワニワニワニワニ……』クンカクンカ

タケシが出したポケモンフーズの匂いを嗅ぐ。そして、

ワニノコ『ワニヤワニヤワニヤワニヤ』

美味しそうに食べ出した。それを見て「へえー!」、と感心するカズナリだった。

コトネ「私とタクヤが連れてきたんだよ。どおどお?すごい?」

タケシ「世界一のポケモンブリーダーを目指してるんだ」

カズナリ「うわあ、本当ですかあ!?!」

タケシ「よし、後でいろんなレシピを教えてあげるよ」  
カズナリ「ありがとうございます！」

そのあと、カズナリの父さんがサトシたち三人に、モーモーミルクから作ったソフトクリームを渡したりして、ジヨウトフェスタを楽しんでいる様子だった。

カズナリ父「コトネのお友達かい？」

コトネ「うん。マリルを助けてくれたの」

タクヤ「サトシ君にタケシ君にヒカリちゃんです」

サトシ「初めまして」

カズナリ「僕、カズナリです！」

カズナリ父「カズナリの父です」

コトネ「じゃじゃーん！カズナリのお父さんは、ズバリこのフェスタの責任者って事ね。でもってカズナリは、これでもブリーダーなんだよ？」

カズナリ「これでもなんて酷いな」

いや、実力的に「これでも」で充分だと思う。

サトシ「コトネは、トレーナーって言うってたよな？」

コトネ「うん。タクヤと一緒に、ジヨウトのジムを回ってるの。あなたたちは？」

サトシ「俺は、シンオウリーグに挑戦中さ。シンオウに来て、バッジを7個ゲットしたんだぜ？」

ピカチュウ「ピカピカ！」

コトネ「すごい！私たちは、まだバッジは二個。キキョウジムのウイングバッジと、ヒワダジムのインセクトバッジよ。で、ヒカリンは？」

ヒカリ「あたしは、コーディネーター。今はスイレンタウンのコン

テストを目指してるのよ」「  
コトネ「へえ、私はバトル専門だけど、コーディネータの友達で  
きたの初めてよ」

そんなふうには話しているとき、ワニノコが急に話しかけてきた。

ワニノコ「ワニワニ！」

コトネ「えっ、何、ワニノコ？」

タクヤ「そろそろシヨ一の時間ってことじゃねえか？」

コトネ「あっ、忘れてた！」

ヒカリ「シヨ一？」

タクヤ「ジヨウトのポケモンを紹介するシヨ一」

コトネ「みんなも是非見ていってよ」

サトシ「ヒカリ、タケシ、うん！」

全員が元気よく頷く。いよいよシヨ一の始まりだ。俺は、カズナ  
リの父さんにあることを頼んでおいたから、そのときが来るのが楽  
しみだ。

To Be Continued . . .

コトネ「シンオウ地方のみなさん、こんにちは！」

コトネがステージに上がり、来客へ挨拶する。いよいよショーの始まりだ。

コトネ「ジョウト地方のワカバタウンからやって来た、コトネです。ジョウトでは、新人のトレーナーは、チコリータ、ヒノアラシ、ワニノコのどれかをもらえます。シンオウ地方では、珍しいポケモンばかりって事ね」

「わぁー」、と来客たちが興奮している。チコリータやヒノアラシ、ワニノコは滅多に見られないポケモンだからだ。

コトネ「チコリータ、出番よ！それっ！」  
チコリータ『チッコ〜！』

コトネはチコリータを出す。  
ヒカリはチコリータを図鑑で調べていた。

コトネ「あ、あたし？」  
ポッチャマ『ポチャ？』

ヒカリが名指しされ、？を頭に浮かべていた。これはアニメのバトルイベントだ。

コトネ「これからチコリータとポケモンバトルをしてもらいたいと思います。ささ、ステージへどうぞ」

コトネはヒカ리를ステージに上がるよう促す。来客もヒカ리를羨ましそうに見ている。

タクヤ「こつからは俺が審判、兼進行として話しましょう。もしコトネのチコリータに勝つたら、記念に素晴らしい賞品を渡します」  
ヒカリ「えっ……？ よおし！」

ヒカリは賞品と聞いて気合が入ったようだ。

タクヤ「これより、コトネvsヒカリのバトルを行います。使用ポケモンは一体。どちらかが戦闘不能になったとき、試合終了とします。なお、道具の使用は認められません」

ヒカリ「行くわよ、ポツチャマ！」

ポツチャマ『ポチャー！！』

チコリータ『チコーー！！！！』

コトネ「そうこなくっちゃ！！！！」

サトシ「ヒカリ、頑張れ！！！！」

サトシもヒカりにエールを送る。ヒカリも気合が入っていた。

タクヤ「シンオウの新人用ポケモンvsジヨウトの新人用ポケモンの組み合わせで贈るバトル！それでは、ポツチャマvsチコリータのバトル、始め！」

コトネ「チコリータ、葉っぱカッター！」

チコリータ『チィーッ、コーーッ！！！！』

ポツチャマ『チャーラーッッ』

タクヤ「チコリータの先制！葉っぱカッターが直撃いー！！！！」

チコリータは葉っぱカッターを放つ。ポツチャマはよけられず、

当たってしまった。

ヒカリ「ポツチャマ、バブル光線！」

ポツチャマ『ポチャー……。ポツチャマアアアア！！！！』

コトネ「光の壁！」

チコリータ『チコーー』

タクヤ「ポツチャマ、反撃のバブル光線！しかし光の壁で阻まれた  
アー！！！」

ポツチャマはバブル光線を放つが、光の壁に阻まれ、ダメージは半減する。

ヒカリ「ポツチャマ、つつくよ！」

ポツチャマ『ポツチャマー！ー！ツツツ、チャー！ー！ツツ！！』

チコリータ『チコーー！ツツ！！』

チコリータ「よしっ、効果は抜群」

タクヤ「おっと、ここでポツチャマのつつくが直撃！チコリータ、大丈夫かあ？」

カズナリ「チコリータは草タイプだから、飛行タイプのつつくは、ダメージが大きいね」

カズナリが冷静に解説している。その内にヒカリは攻撃を続ける。

ヒカリ「ポツチャマ、もう一回バブル光線！」

ポツチャマ『ポーーチャマー！ー！ツツツ！！！！！！』

コトネ「光の壁！」

チコリータ『チコッ！』

タクヤ「おっと、またもや光の壁でバブル光線を防ぐチコリータ！  
このままではチコリータ、攻撃できずにギリ貧だぞあ？」

コトネのチコリータは光の壁でガード。しかし全くダメージがないわけではないのでこのままいけばジリ貧だ。

ヒカリ「つつくで突破よ！」

ポツチャマ『チャアー、チャアーッッ！！！！！』

チコリータ『チコーッッ！』

サトシ「決まった！」

チコリータはつつくを受け、吹っ飛ばされた。

タクヤ「あーっつと、つつくを受けたー！これは戦闘不能か？」

俺はチコリータをのぞき込む。案の定戦闘不能になっていた。

タクヤ「チコリータ、戦闘不能、ポツチャマの勝ち！よって、勝者

ヒカリ！」

ヒカリ「やったわ！」

タクヤ「光の壁は、バブル光線には効果があっても、つつくには効果はない」

カズナリ「ヒカリの、作戦勝ちってことだね！」

コトネ「私の判断ミスだったって事ね。ごめんねチコリータ。でもよく頑張ってくれたわ」

コトネはチコリータをボールに戻して言った。

ヒカリ「ご苦労様、ポツチャマ」

ポツチャマ『ポチャ！』

コトネ「おめでとうヒカリン」

タクヤ「おめでとう、ヒカリちゃん。ほら」

ヒカリ「ん？」

俺は、ヒカリに孵卵器が入った箱を手渡した。

タクヤ「今、素敵な賞品が手渡されました！」

コトネ「開けてみて、ヒカリン」

ヒカリ「何かしら？」

ヒカリは箱を開けると驚いた。

ヒカリ「わあ〜」

タクヤ「プレゼントはなんと、ポケモンの卵だー！！！！」

ヒカリ「ポケモンの卵か、すごい！！！！」

ヒカリ「ありがとう、コトネ、タクヤさん」

コトネ「どんなポケモンが生まれるかは私にもわからないって事ね」

タクヤ「楽しみにしていなよ？」

そんなおめでとうムードの中、ドオオオオオオオオオオン！という音が鳴り響いた。

ヒカリ「あっ」

コトネ「なんなのあれは？」

サトシ「ロケット団！」

カズナリ「フェスタの試食品をあんなに」

タクヤ「ロケット団？シンオウに何でカントーの組織がいるんだよ」

もちろん、アニメを見ていた俺は知っているが、知っていたら怪しまれるだけだ。このイベントを回避するために、ムサシ、コジロウ、ニヤースには、早々と立ち去ってもらおう。

ムサシ「あっ、ジャリボーイ！」



カズナリ父「おい、その試食品を返せ！」

ムサシ「おい、その試食品を返せ！の声を聞き」

コジロウ「光の速さでやってきた」

タクヤ「行けっ、ゲンガー！トリックでその岩と試食品を入れ替える！」

ロケット団「え？」

ゲンガー「ガーーーーッッ！！！」

俺はさっさとゲンガーを出し、トリックで岩と試食品を入れ替えた。

タクヤ「出番だテッカニン！シザークロスで気球を粉々にしてしまえ！」

テッカニン「テッカ！」

テッカニンはシザークロスで気球を粉々にする。するとアニメ補正よろしく気球が爆発した。いちいち長えなげんだよ、こいつらの登場セリフ。

ムサシ「なんで登場セリフの間に攻撃されるの？」

ニヤース「登場してすぐ退場だニヤンて」

コジロウ「しかも登場セリフすら言い切ってないぞ」

ロケット団「やなかんじー！！！！！」

ソーナンス「ソーナンス！！！」

ロケット団はさっさと退場していった。すると来客全員が「うおーーーー！」とさげんだ。

タクヤ「さんきゅー、ゲンガー、テッカニン」

ゲンガー「ガーーーー！」

テツカニン『テツカ!』  
タクヤ「カズナリの父さん、試食品取り返しました」

とにかく、取り返した試食品を、カズナリの父さんに渡した。

カズナリ父「ありがとう、タクヤ君、ゲンガー、テツカニン」

タクヤ「どういたしまして」

ゲンガー『ガー、ゲンガー!』

テツカニン『テツカ、テツカ!』

コトネ「やっぱりタクヤはすごいって事ね」

サトシ「スゲエ、タクヤさんのポケモン。テツカニンは色違いだ!」

タクヤ「このゲンガーとテツカニン、とてもよく育てられているぞ」

ヒカリ「うわあ、色違いだあ!」

ポツチャマ『ポチャア!』

すると、俺をサトシがキラキラとした目で見つめてきた。おっ、これはもしかや?

サトシ「タクヤさん、俺とバトルしてください!」

タクヤ「そのことなんだが、ちょっといいかい?」

俺はステージにサトシを上げ、マイクを手にとった。

カズナリ父「おや?タクヤ君、その子にするのかい?」

タクヤ「はい。皆さん、聞いてください!これよりスペシャルイベ

ント、俺vsこのサトシ君の3on3のバトルをします!」

サトシ「ええっ?」

タクヤ「もともとこれを計画していたのですが、サトシ君の先程の要望に応えるのにちょうどいいと思い、このイベントの相手をサトシ君に決めさせてもらいました!」

そう、計画していたのはこれなのだ。

タクヤ「バトルフィールドは、この近くの広場を使います。ご覧になりたい人は、今から10分後、そのの広場に来てください！それでは！」

いよいよ、夢だったサトシとのバトルが始まる！

T o B e C o n t i n u e d . . .

**E p i s o d e 1 9    チコリータvsポツチャマ！    ショーとあのロケット団**

次の話は、タクヤvsサトシの3on3ガチバトルです！

Episode 20 タクヤvsサトシ! ガチバトル3on3!! (前書き)

いよいよ20話目突入

タクヤvsサトシです!!

Episode 20 タクヤvsサトシ！ ガチバトル3on3！！

タクヤ「皆さん、俺とサトシ君のバトルのために集まっていたいただき、ありがとうございます！」

観客「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

観客はさっきのフェスタ以上の人数になっていた。どうやら来客たちが友人を連れてきたり、家族を連れてきたり、噂や話題になっていたようだ。

ヒカリ「すごい人数」

ポツチャマ「ポチャポチャ」

タクシ「タクヤさんのポケモンがどんななのが勝敗の決め手だな」  
コトネ「サトシのポケモンがどんなのは知らないけど、タクヤはすっごく強いよ。今まで、本気を出したことがないのに、ジムリーダー戦でも戦闘不能になったことないんだから」

カズナリ「たしかに、僕が2体倒したのも、対新人用ポケモンだったみたいだから、今回、本気を出すと云ってたタクヤさんの実力は計り知れないよ」

タクシ「本気を出してないのに、ジムリーダー相手でも一匹も戦闘不能になつたことがない!？」

ヒカリ「どれだけ強いよ、それ……」

ポツチャマ「ポツチャマ……」

おいおい、過大評価しすぎじゃないのか？

タクヤ「では、審判はカズナリの父さん、お願いします」

カズナリ父「それではこれより、タクヤ対サトシのバトルを行う！使用ポケモンは3体。どちらかのポケモンがすべて失われたときに

試合終了とします！」

タクヤ「サトシ君、君はナナカマド博士から見どころのあるヤツだと聞いたよ。だから今回は、本気を出させてもらおう。出番だ！押し流せ、スターミー……！」

サトシ「スターミーか、あいつを思い出すな……。水タイプなら電気タイプ。行けっ、ピカチュウ！」

ピカチュウ『ピカッ！』

俺は手持ちの切り込み隊長、スターミーを出した。

タクシ「タクヤさんはスターミーか」

ヒカリ「相性ではサトシが有利だけど……」

ポツチャマ『ポチャ……』

コトネ「タクヤのスターミーのバトルは初めて見るなあ」

カズナリ「タクヤさんのポケモンだから、凄そうだな……」

いよいよバトルが始まる。

タクヤ「サトシ君、君が先行でいいよ」

サトシ「はい！」

カズナリ父「それでは、始め！」

サトシ「ピカチュウ、先手必勝！10万ボルト……！」

タクヤ「かわせ！」

ピカチュウ『ピイカアチユ……！！！！！！』

サトシ「は、速い！？」

スターミーは一瞬でピカチュウの後ろに回る。

タクシ「あのスターミー、相当な速さだぞ！」

タクヤ「今度はこっちから！スターミー、10万ボルトをお返しだ

！」

ピカチュウ『チュ、チュウ……』

タクヤ「パワーも相当なものだぞ！」

サトシ「ピカチュウ！クソツ、電光石火！」

ピカチュウ『ピツカア！！』

タクヤ「サイコネシスで受け止める！」

ピカチュウはサイコネシスに捕まった。

タクヤ「そのまま上に放り投げてハイドロポンプ！」

上に放り投げ、ハイドロポンプをヒットさせる。その一撃でピカチュウはもうボロボロだった。かろうじて戦闘不能に放ってはいなかったが……

タクヤ「今の一撃を受けて倒れないとは、相当なガッツだな」

サトシ「このままじゃキツイ。一旦戻れ、ピカチュウ。行けっ、ムクホーク、君に決めた！！」

うーん、生の「君に決めた！」最高！

ムクホーク『ムクホー……ック！！！！』

タクヤ「交代か。だったらこっちも。戻れスターミー！掻き回せ、

テツカニン！」

テツカニン『テツカ！！！！』

俺はテツカニンを出す。やはり不利なタイプを出したことで、観客は驚く。

ヒカリ「テツカニン！？タイプ相性じゃ不利なのに！」



タケシ「もしかして、何か考えがあるのか!？」

テツカニンの出番。コイツは俺の相棒だ。

サトシ「色違いのテツカニン。タイプで不利なのに、何か考えがあるんだろうか……」

タクヤ「コイツは俺のパートナーだ。そして、君は今何で不利なタイプのポケモンを出したか不思議に思ってるだろう?」

サトシ「は、はい」

タクヤ「一つだけ言っておこう。いくら不利でも、当たらなければ意味がない!テツカニン、フルスピード行くぞ!」

テツカニン「テツカ!」

サトシ「さ、さっきより速い!ロケット団の時は本気じゃなかったのか!?ムクホーク、電光石火!」

タクヤ「テツカニン、高速移動から影分身!」

テツカニン「テツカ!テツカ、テツカ、テツカテツカテツカテツカ!……!」

テツカニンのスピードが加速でどんどん上昇していく。この世界では能力の上昇に上限がないので、素晴らしいスピードになっている。

タケシ「あのテツカニン、そうとう速いぞ!分身の数も相当だ!」

ヒカリ「サトシ……」

おの戦くタクシとヒカリ。観客たちもすごい声を上げている。

サトシ「クソッ、全然当たらない!」

タクヤ「ほらっ、まだまだ行くぞ、身代わりから5回連続で剣の舞!……!」



サトシ「ムクホーク！！！！」  
ムクホーク「ム、ムクホー……」  
カズナリ父「ムクホーク、戦闘不能、ドサイドンの勝ち！」

観客が盛り上がる。もうドサイドンは止まらない。

サトシ「ムクホーク、ゆっくり休んでくれ。ハヤシガメ、君に決めた！」

ハヤシガメ「ガメツ！！！！」

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール！」

ハヤシガメ「ガア、メエ！！！！」

タクヤ「跳べ、ドサイドン」

ドサイドン「ドサイドオン！！！！」

サトシ「跳んだ！？」

タクヤ「高速落下、メガホーン！！！！」

ドサイドンのメガホーンが決まる。体重や重力加速度も重なって、相当な威力になってしまった。

カズナリ父「ハヤシガメ、戦闘不能、ドサイドンの勝ち！！」

サトシ「戻れハヤシガメ、ゆっくり休んでくれ。ピカチュウ、君に決めた！俺は最後まで全力で戦う！」

タクヤ「うんうん、あきらめない精神。いいね！戻れ、ドサイドン。

最後はパートナー対決と洒落込もう。掻き回せ、テッカニン！」

テッカニン「テッカ！！！！」

最後のポケモンピカチュウはもうフラフラだ。さっさと決めさせてもらおう。

タクヤ「テッカニン、影分身！そこからシザークロスだ！」

サトシ「ピカチュウ、10万ボルト!!」

テツカニン『テツカ!』

ピカチュウ『ピイカアチューーーー!!!!!!!!』

10万ボルトは分身に当たり、シザークロスをヒットさせるテツカニン。

タケシ「サトシが勝つのはもう難しいな」

ヒカリ「サトシ、ピカチュウ……」

ポツチャマ『ポチャチャ、ポチャチャ……』

テツカニンは加速しまくり、分身も、消えてもどんどん継ぎ足していく。

タクヤ「これで最後だ!テツカニン、シザークロス!」

サトシ「ピカチュウ、フィールド全体に雷だ!」

ピカチュウ『ピイ、カア、チューーーーーーーーー!』

雷はすべての分身をかき消した。だが……

ヒカリ「やった、テツカニンを倒した!」

タケシ「いや、こんなに簡単にやられるはずがない」

カズナリ父「テツカニン、戦闘h……」

タクヤ「今だテツカニン、穴を掘る!!!!!!」

テツカニン『テツカア!!!!!!!!』

穴から飛び出したテツカニンが、ピカチュウに体当たりをして戦闘不能にした。



みんなもアニメ同様笑う。

タクヤ「そうだ、カズナリの父さん」

カズナリ父「ん？なんだい」

タクヤ「ジョウトフェスタが終わっても、シンオウに何日か滞在するんですよ？」

カズナリ父「そうだよ？」

タクヤ「俺、一時サトシ君たちの旅についていきたいんです」

カズナリ「僕も、タクシさんにブリーダーのことをいろいろと教えてもらいたいんだ」

タクシ「俺に？」

コトネ「私も、もうすぐ開かれるスイレンタウンのコンテストを見てみたい！」

カズナリ父「いいよ。君たち、この三人をよろしく頼むよ」

サトシ、ヒカリ、タクシ「はい！」

アニメイベント同様、サトシたちの旅についていけることになった俺達だった。

To Be Continued . . .

**E p i s o d e 2 0 タクヤvsサトシ！ ガチバトル3on3！！（後書き）**

スターミーのアニメの鳴き声は表現しづらいので、省略させていた  
だきました

Episode 21 谷間の発電所は危険が一杯！

ヒカリのコンテスト出場のため、スイレンタウンを目指す俺達。今はポケモンたちが食事をしている。

ヒカリ「さあヒノアラシ、食べて」

ヒノアラシ『ヒノヒノオ』

ヒノアラシは喜んで食べ出す。

コトネ「私あげた卵から孵ったんだから絶対良い子って事ね」  
タクヤ「スゲエ食べっぷりだな」

ヒノアラシはすごいスピードで食べまくっている。

ポツチャマ『ポチャポチャー！ポチャ？』

ポツチャマがヒノアラシに気づく。

ヒカリ「ポツチャマ、新しい仲間だから仲良くね」  
ポツチャマ『ポツチャマ』

任せろ！と言わんばかりに胸を張るポツチャマ。

ポツチャマ『ポチャポチャ』

マ。「よろしく」と言ってるようにヒノアラシに話しかけるポツチャマ。



ヒノアラシ『ヒノオ？ヒノ』プイ  
ポツチャマ『チャア！？』(；。)。！

ヒノアラシはそっぽを向く。ポツチャマはそれにショックを受けていた。しかしめげずに話しかけるポツチャマ。

ポツチャマ『ポチャ！』

ヒノアラシ『ヒノヒノヒノヒノ』

ポツチャマ『チャア！？』(。 。 1111)

また話しかけてそっぽを向かれるポツチャマ。

ポツチャマ『ポオチャアアア』、(、。(ノ

ポツチャマは怒り出す。そして、ヒノアラシのお尻を啄んだ。

ヒノアラシ『ヒノオ~~~~』？( > < )!!

ポツチャマ『ポツチャツチャツチャ』( ^ ^ )

痛がるヒノアラシを見て笑うポツチャマ。今度はヒノアラシの反撃。

ヒノアラシ『ヒンノオオオ……』。ヒノツヒノツヒノツヒノツ!!!!  
ポツチャマ『チャー！ポチャチャチャー！ポチャ~~~~~ツ!!  
!!!!』

ヒノアラシは鼻の先でつつく。

ポツチャマ『ポチャア〜』

ヒノアラシ『ヒノオ〜』

ピカチュウ『ピカピカ』

ピカチュウが仲介役として入る。ほんと、苦勞人だなサトシのピカチュウは。

タクヤ「まったく、何喧嘩してんだよ」

ヒカリ「ダメでしょう、仲良くしなきゃ」

サトシ「なあヒカリ、バトルしてみないか？」

ヒカリ「バトル？」

タクヤ「確かに、ヒノアラシのことを知るには、バトルが一番だからな」

ヒカリ「そうね。ヒノアラシ、バトルよ」

ヒノアラシ『ヒノヒノーツ!!』

サトシとヒカリのバトルか……

サトシ「俺のポケモンは、ハヤシガメ、君に決めた！」

ハヤシガメ『ガアメ!』

ヒカリ「ヒノアラシの使える技は」

ヒカリは図鑑を取り出し、技を調べ出した。

ヒノアラシの使える技は、火炎車、スピードスター、煙幕。

ヒカリ「うん、なかなかの技を覚えてるわね」

サトシ「いくぞヒカリ！」

ヒカリ「いいわよ」

サトシ「ハヤシガメ、葉っぱカッター！」

ハヤシガメ『ンガア!』

ヒノアラシ『ヒノーツ!』

ハヤシガメのハツパカッターをジャンプでかわす。なかなかの身のこなしだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、火炎車！」

ヒノアラシ「ヒノツ、ヒノオ！！！」

ハヤシガメ「ガアメ！！！」

サトシ「やるなあ、ヒノアラシ。いい火炎車だ！」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ」

サトシ「これならどうだ？ハヤシガメ、エナジーボール！」

ヒノアラシ「ヒノツ」

またもジャンプでかわす。

ヒカリ「ヒノアラシ、スピードスター！」

ヒノアラシ「ヒノツ！！！」

ハヤシガメ「ンガンガッ！！！」

ヒノアラシのスピードスターがクリーンヒット。ハヤシガメが呻く。

サトシ「行くぞ、ハヤシガメ！葉っぱカッター！」

ハヤシガメ「ガメツ！」

ヒノアラシ「ヒノツ！」

またまたジャンプでかわすヒノアラシ。本当にすごいやつだ。

ヒカリ「ヒノアラシ、煙幕！」

ヒノアラシ「ヒノオ」

煙幕を撒布するヒノアラシ。

ヒカリ「続けてスピードスター！」

ヒノアラシ「ヒイノッツ！」

ハヤシガメ「ンガツ！」

コトネ「やるう！」

サトシ「まだまだあ！ハヤシガメ、ロツククライム！」

ハヤシガメ「ガアアア、ンガアアアア！！！」

ヒノアラシ「ヒノオオオ！」

ヒカリ「ヒノアラシ、大丈夫？」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ！」

タケシ「そこまで！」

ヒカリ「え？」

タケシ「最初のバトルだし、ここまでにしておこっ」

タケシがそう言って止める。あれ？何か忘れてるような……？

ポツチャマ「ポチャポチャー！！！」

ポツチャマがハヤシガメに何か言っている。

ヒカリ「すごかったわーヒノアラシ」

タケシ「なかなかだったぞ」

カズナリ「かつこよかったよー」

コトネ「初戦にしては、ヒノアラシ、あなたががんばったって事ね」

ヒノアラシ「ヒノヒノオ！」

ポツチャマ「チャー……」

ヒノアラシが寝められ、呆然としているポツチャマ。

ヒカリ「はあい、ご褒美にあなたの好きなポフィンよ」  
ヒノアラシ「ヒノヒノッ」  
ポツチャマ「ポーーーーッチャマ！」

ヒカリがヒノアラシにあげたポフィンを、ポツチャマが奪った。

ヒカリ「何するのよポツチャマ」  
ポツチャマ「ポチャッ」(。・。・)  
ヒノアラシ「ヒノオオオ、ヒノッ」  
ポツチャマ「ポチャッ!?!」

ヒノアラシがキレてポツチャマに頭突きした。  
またも喧嘩が勃発する。

ヒカリ「止めなさい二人とも!やめないとご飯又キ!」  
ピカチュウ「ピカピイカ、ピカチュウ。ピイカ……」

またもピカチュウが止めに入った。

コトネ「なかなか難しいって事ね」  
カズナリ「あれっ、コトネ。マリルは?」  
コトネ「えっ、マリル?そこにいない?」  
カズナリ「いないよ」

えっ?ヤベエ、マリルさまよいイベント忘れてたアアアアアアア  
ア!!!!!!!!!!

コトネ「また勝手にどっか行っちゃったのかしら?」

結局みんなで探すことになりました。

サトシ「マリル〜?」

ピカチュウ『ピカピカア〜?』

タクヤ「マリル〜?」

ヒカリ「どこ行ったの〜?」

コトネ「マリル〜?」

ポツチャマ『ポ〜チャア〜?』

ヒノアラシ『ヒノヒノ〜?』

ポツチャマ、ヒノアラシ『ん?』 ( ) ( )

「またも向き合って争う。」

「坂道を登った先にあったのは、谷間の発電所だった。」

サトシ「あれは?」

タクヤ「あれは谷間の発電所だね」

「ポケギアで調べてから言う。」

タクヤ「おそらくあそこに迷い込んだんだろう」

サトシ「行ってみよう!」

「行って、覗いてみる。やはりマリルがいた。」

コトネ「あつ、いた!」

「マリルを見つけたが、マリルが建物に入っていくと、自動ドアが閉じた。」

コトネ「あゝ」

俺たちはマリルを追いかけ、入る。するとポツチャマがヒノアラシを突き飛ばし、またも喧嘩が勃発した……かと思われたが。

ポツチャマ『ポチャアアア』

電気を受けてしびれていた。

ヒカリ「ポツチャマ!?!」

コイルA『ビRRRRR』

コイルB『ビRRRR、ビRRR』

カズナリ「コイルだ」

タクヤ「多分、警備をしてるんだろう」

追いかけてきたので俺たちは必死に逃げる。そして、中央管制室へと転がり込んだ。そこには管理人らしき人が眠っていた。

管理人「ん?なんじゃお前さんたちは?」

コトネ「あの、勝手に入ってすみません。実は、私のポケモンが、ここに迷い込んだんです」

管理人「ほう、ポケモンがお」

コトネ「はい。マリルなんです」

管理人「それならこの警備モニターで館内を全て見られるぞ」

そう言ってくれた直後、さっきのコイルが入ってきた。

コイルA、B『ビRRRRRR』

管理人「あー、まてまて。この子達は怪しいもんじゃないぞ」

コイルA、B『ビRRRRRR、ビ、ビ』

どうやらこの人がコイルの主人のようだ。

コトネ「えーっと、あつ、いたいた」

やっとマリルを見つけた。地下の倉庫だと教えてもらい、俺たちはそこへ直行した。

コトネ「マリル〜?」

ポツチャマ『ポチャポーチャ!』

ヒノアラシ『ヒノヒノ!』

サトシ「マリル〜?」

タクヤ「どこだ〜?」

コトネ「マリル〜? ああっ!」

マリル『リイ? リルウ!』 ( ^ ^ ) /

コトネ「マリル〜! もう、勝手に رفتちゃダメだって言ったでしょ」

マリル『リルリルウ』

ヒカリ「よかったわね。さ、戻りましょ」

そう言ったとたん、バチンツ、という音を立てて停電した。そう思ったらすぐ回復した。俺たちは閉じ込められ、ヒノアラシとポツチャマは締め出された。閉じ込められた俺たちは、いったいどうなるのか!?

To Be Continued . . .



## Episode 2 地下室からの脱出劇!!

サトシ「おかしいぞ、ドアが開かない」

タクヤ「閉じ込められた、か……」

閉じ込められるイベントに巻き込まれてしまった俺。兎に角脱出する方法を模索するか。

タクシ「今の停電で、非常ロックがかかったんだろっ」

カズナリ「そんな。僕たちここから出られないの?」

ポツチャマ『ポチャー』

ヒノアラシ『ヒノヒノ』

ドアの向こうからポツチャマとヒノアラシの音がする。

ヒカリ「ポツチャマ、ヒノアラシ!」

サトシ「ピカチュウ、ドアに向かって10万ボルト!」

ピカチュウ『ピイカアチューー……!!!!』

ポツチャマ『ポチャチャチャチャチャ……!!!!』

なんかポツチャマが痺れた声が聞こえたが、聞こえなかったことにしよう。

サトシ「ダメか……」

タクヤ「しょうがねえ。俺がなんとかしようか」

俺はバッグからパソコンを取り出して、転送システムを起動した。

サトシ「何ですか、それ?」

タクヤ「俺の自宅とつながってる転送システム。ちなみに自作だ」  
タクシ「自作の転送システム!？」

タクヤ「ああ。おい、非常事態だ。シャワーズとベトベトンを送ってくれ」

メイド「了解しました」

タクヤ「サンキュー。出番だ、シャワーズ、ベトベトン!」

シャワーズ『シャワーズ!!』

ベトベトン『ベエトオベエトオオン!!』

俺はシャワーズとベトベトンを繰り出す。どうするのかというと

……

タクヤ「ドアに張り付け」

サトシ「どうするんですか?」

タクヤ「溶ける!」

シャワーズ『シャワーワア』

ベトベトン『ベエトオ』

タクヤ「そのままドアの隙間に入り込んで溶けるを解除!」

溶けるを解除しようとする二匹。しかしドアを開けることは無理だった。このままじゃあいつらが危ないので、ボールに戻した。

タクヤ「これでもダメか……」

仕方なく二匹を転送し直す。

タクシ「そうだ、警備モニタを使えば……」

タクヤ「いや、ダメだ。あのじーさん、昼寝すると言ってた」

コトネ「待つしかないって事ね」

カズナリ「ずっと気づかれなかったらどうするの?」

タクヤ「ネガティブになんかなよカズナリ。ポジティブでいこうぜ」  
カズナリ「だって、あのおじいさんが僕たちに気がつかなくて、そのまま家にかえって長期休暇を取ったら!? そうなったら、そうなたら、そうなたら、この部屋で、一生過ごすことに」  
タクヤ「ならねえよ」

とりあえずカズナリのネガティブシンキングにストッパーをかけるおく。

サトシ「なんかてはないのかな?」

タクヤ「だったらあれはどうだ? 通気口」

サトシ「そうか、確かめてみよう!」

タクヤ「気をつけるよサトシ!」

サトシ「ああ」

タクヤ「サトシ君、ちょっとどいている。出てこいテッカニン!」

テッカニン『テッカ!』

タクヤ「シザークロスで通気口のカバーを切り捨てる」

テッカニン『テッカ!』

テッカニンを使って通気口のカバーを切り捨てた。

コトネ視点

コトネ「もし一生過ごすとなると、ここで結婚かあ」  
ヒカリ「ん?」

私はカズナリの言っていた、この部屋で一生過ごす、ということから、そんなことを考えた。

コトネ「すると、四択って事ね」

ヒカリ「えっ、何言ってるの？」  
コトネ「カズナリはないから三択か……」

カズナリはカツコ悪いし、後ろ向きだし、弱虫だし、ないと思う。  
それよりも私は気になっていることがある。

コトネ「サトシはヒカリンの彼？」

「こういうことだ。ヒカリンはサトシとそついう関係なのか、とても疑わしい。」

ヒカリ「えっ！？ち、違うわよ！」

コトネ「サトシって、結構いいよね。タクヤもなかなか……」

タクヤとも一緒に旅してて思うことがある。タクヤは強いし、結構カツコイいほうだと思うし、前向きだし、かなりの優良物件だと思う。

ヒカリ「そお？タクヤさんのことはあんまり知らないけど……」

コトネ「ねえ、ヒカリンなら、四択として誰を選ぶ？」

ヒカリ「うー……ん、考えたこともない」

コトネ「普通真っ先に考えると思うけど」

ヒカリンって、天然さん？そんなふうだと考えると、タクヤがテッカニンで通気口のカバーを切ってしまった。

#### タクヤ視点

サトシ「うーん、狭いなあ。とても入っていけないや」  
ピカチュウ『ピカピカア、ピカチュ』

サトシ「おつ、ピカチュウ、行ってくれるのか？」  
ピカチュウ『ピカピカッ!』

ピカチュウが通気口に入っていく。

サトシ「よおし、ハヤシガメ、君に決めた!」

ハヤシガメ『ンガァ!』

タクヤ「おつ、ドア破壊すんのか?」

サトシ「ああ。今度はハヤシガメの技で試してみる」

コトネ「あれっ、ピカチュウがおじいさんに知らせに行ったんじゃないの?」

タクヤ「サトシ君は見たところじっとしていられないタイプだからな。まっ、男はカズナリみたくなよなよしてるより、サトシ君みたくじっとしていられないような、熱血なほうがいいと思うがな」

カズナリ「タクヤさん……」

コトネ「うんうん、男の子はこうでなくちゃ」

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール!」

ハヤシガメ『ンガァ!』

サトシがハヤシガメに、ドアに向けてエナジーボールを放つように指示する。しかしドアは壊れず、あるうことか跳ね返ってきた。

タクヤ「あつぶね。出番だポーマンダ!守るでみんなの壁になれ!」

ポーマンダ『マンダッ!』

サトシ「すいません、タクヤさん。戻れハヤシガメ。ハヤシガメでもダメか」

コトネ「はいつ、次は私!さあ、出てきてキリンリキ!ドアに向かって、ダブルアタックよ!」

キリンリキにダブルアタックを指示。だがやはりはじき返された。

コトネ「ダメか……」

タクヤ「俺がいこう。俺の持てる力全力です」

コトネ「タクヤが？」

タクヤ「ああ」

俺は、転送装置からガブリアス、カイリユー、ギャラドス、ガラガラ、バンギラスを転送してもらった。

タクヤ「出てこいみんな！」

サトシ「スツゲエ」

タクヤ「強そうなポケモンたちばかりだ」

ヒカリ「スツゴイ」

タクヤ「全員、一点集中だ！逆鱗！」

全員が一点に攻撃を集中させて逆鱗をする。だが、これでも壊れない。みんなをボールに戻して、下の手持ちに戻る。

タクヤ「これでも壊れないとか、どんだけ頑丈なんだよ……」

今度はサトシがボールを持ってきて、ドアの隙間に入り込ませる。

サトシ「ピカチュウが頑張ってるんだから、俺だって！」

コトネ「熱いね」

タクヤ「サトシから熱血を取ったら、何も残らないからな」

コトネ「ジムバッジ七個は、伊達じゃないって事ね。カズナリも見習わないとね」

カズナリ「やっても無理なことは、無駄だと思うけど」

そうこうしている間に、サトシがボールを取り落とす。

コトネ「あっ」

ヒカリ「ダイジョーブ。サトシはあんなことじゃ負けないわ」

タケシ「そうだな」

タクヤ「さっすが男の子。っつーことで、俺も頑張るぜ」

サトシと同じように、ボールでこじ開けようとする。

コトネ「うんうん。サトシもタクヤもサイコーね」

ヒカリ「サイコー？」

さすがに頑張りすぎなので、一息入れることになった。

タケシ「ビスケツトは8枚メンバーは5人。さあ、どうやって分けるよ」

タクヤ「女の子を優先させればいいさ。男はこういうところでポイント稼ぐもんだぜ、タケシ君？君は美しい女性が好みなんだろ？普段から綺麗な人に目が行ってるからさ。おそらく今までもナンパ癖とかあっただろ？」

サトシ「確かに……」

サトシとヒカリは苦笑いしていた。

少し休憩していると、また停電が起きて、すぐにまた電気が復旧した。おそらくピカチュウがやったのだろう。

タクヤ「ドアが開いたぞ」

サトシ「ピカチュウたちがやったんだ！」

ピカチュウ「ピカピー！！！」

サトシ「ピカチュウ！ありがとな」

ヒノアラシ「ヒノーッ！」

ポツチャマ『ポチャツ！ポチャーッ！』

ヒノアラシが光に抱きつこうとする。だがポツチャマが邪魔をして、また喧嘩になった。ヒカリはヒノアラシを戻し、喧嘩を止めた。俺たちは再び中央管制室にいるおじいさんに知らせに来た。

サトシ「あのー、すみません」

管理人「ん、ああ、なんじゃ？」

コトネ「マリルが見つかりました。色々とお騒がせしました」

管理人「おお、それは良かったのお。気を付けて行くんじゃぞ。そんじゃな」

ヒカリ「また寝ちゃった」

俺たちは発電所を抜ける。空はもう暗くなっていた。

コトネ「すっかり暗くなっちゃった」

サトシ「でも、マリルが見つかってよかったよ」

ピカチュウ『ピカピカ』

タクヤ「む？」

サトシ「どうしました」

タクヤ「あの時にいたロケット団の気配がする」

そういうと、マグカルゴをかたどったロボットが出てきた。

サトシ「な、なんだ!?!」

ムサシ「やっと充電が終わりました」

サトシ「ロケット団!」

コトネ「またあなたたち!?!」

コジロウ「よー！ー！聞けえ？このメカの表面はただ色を塗ってるわけじゃないんだ」



そういつと、ロボの表面が輝き出した。

コジロウ「見たか！透明な素材で、電気仕掛けでマグマの感じを出してるんだ！」

タクヤ「いや、お前らアホだろ。見た目にこだわって機能がダメダメなロボなんて、存在価値皆無だボケ。出番だスターミー！フルパワーで10万ボルト！」

スターミーの10万ボルトがロボに直撃する。

ニヤース「電気喰う割には電撃対策はして無かったのニヤ！」

ムサシ「だったら、ピカチュウの10万ボルトで充電できるようにしとけばよかつたじゃない！」

コジロウ「だが今回ののはピカチュウじゃなくてスターミーの10万ボルトだ！」

ドガアアーン！！と音を立て、ロボが爆発する。ロケット団は吹っ飛ばされてしまった。何かごちゃごちゃ言っていたが、どうでもいいので割愛しよう。

やっと谷間の発電所のトラブルを解決した俺たちは、次の目的地、スイレンタウンを目指す。

To Be Continued...

### Episode 23 暴れん坊のフカマル登場！！

ヒカリのコンテスト出場のため、スイレンタウンを目指す俺たちは、とあるポケモンセンターに来た。

タクヤ「こんにちは」

ジョーイ「はい、こんにちは」

タケシ「ぬあああ、ジョーイさああん」

まあ、アニメよろしくジョーイさんに話しかけるタケシ。

タクヤ「はいはい、そういうナンパ癖が自分の首絞めてることに気づけコラ」

タケシ「アガッ」

とりあえず後頭部に首刀を叩き込んで気絶させた。その時、子供たちがポケモンを抱えて3人駆け込んできた。

子供たち「ジョーイさん！治療お願いしまーす！」

ジョーイ「あなたたち、もしかして裏山へ行ったの？」

子供A「はい……」

子供B「ついゲットしたくなっちゃって……」

サトシ「裏山に、何かあるんですか？」

ジョーイ「暴れん坊のフカマルがいるのよ。あなたたちも気を付けてね」

俺たちに注意を促す。

ジョーイ「さ、いそいで治療室へ」

タケシ「ジョーイさん、自分も手伝います」

タケシ、復活早っ！！！！！

ヒカリ「暴れん坊のフカマルだつて」

サトシ「暴れん坊つてことは、強いつてことだよな」

タクヤ「俺、ゲットするつもりはないが見に行つてくるわ。じゃ」

コトネ「あつ、ちょっと」

俺はボーマンダに乗つて飛び去る。

タクヤ「ここか。ボーマンダ、上空に飛んで見下ろしてみよう」

ボーマンダ『マンダッ！』

タクヤ「おつ、ポケモンセンターからみんな出てきた。結局捕まえるつもりなのか……。ん、あれがそのフカマルかな？」

フカマルは、いきなり岩を持ち上げてサトシたちに投げつけた。

タクヤ「あつぶねえ。ボーマンダ、サトシたちの前で守る！」

ボーマンダ『マンダ！』

サトシ「あつ、タクヤさん！」

コトネ「いきなり飛び出して、何してたのよ」

タクヤ「ん？この辺の地形把握とフカマルの現在位置確認をボーマンダに乗つて上空からしてた。ゲットするつもりはないから、お前らに動きの支持とかするわ」

フカマル『カーフカフカフカ！！！』

タクヤ「怪力、来るぞ！とにかくポケモンを出せ！」

みんなは岩をよける。

ヒカリ「カズナリ、危ないから下がってて」

カズナリ「育ててみたい！」

ヒカリ「え？」

カズナリ「あのフカマルを見ていたら、タクヤさんのガブリアスのような、立派なガブリアスに育ててみたくなっただんだ！」

タクヤ「よし、よく言った。カズナリ、サポートするぞ！」

サトシ「ゲットするのは俺だ！ブイゼル、君に決めた！」

ブイゼル「ブイブイ！」

カズナリ「僕だって負けないよ！ワニノコ、お願いします！」

ワニノコ「ワニヤワニヤ！」

フカマルは攻撃態勢に入った。

タクヤ「おそろくこいつは、この辺り一帯で一番強いんだろう。力の差を見せつけなければ怯えるはずだ！」

フカマルは怪力で岩を持ち上げた。

カズナリ「ワニノコ、馬鹿力！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カフカフカ！」

ワニノコ「ワニヤア！」

フカマル「カ、フカフカ……！」

岩を持ち上げる大きさがどんどん大きくなっていく。ついにフカマルがうるたえ出す。この状態って、アニメじゃ後半の方だけど、

こんなに早く来るとは。

タクヤ「出番だゲンガー、黒い眼差し」  
ゲンガー「ガァー」

俺はフカマルを逃げられなくする。

サトシ「マズイ、穴を掘るで逃げ」  
タクヤ「逃げられないよ。ゲンガーの黒い眼差しが効いているからね。カズナリ、さつさと弱らせる」  
カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」  
ワニノコ「ワニヤア！！！！」  
フカマル「フカアアアア！！！！」

フカマルが吹っ飛ばされる。

タクヤ「ゲンガー、催眠術」

吹っ飛ばされた先に俺のゲンガーが待ち受ける。催眠術をヒットさせ、眠らせた。しかし、なぜかすぐに起きてしまった。

タクヤ「はあ？なんで眠ってもすぐに起きるんだよ。ゲンガー、舌で舐める」

ゲンガー「ガァー」

舌で舐めまわす。麻痺したが、すぐに振り払った。

タクヤ「なんで状態異常が効かねえの？ゲンガー、鬼火！」  
ゲンガー「ガァー」、（、）ノ

ゲンガーもイライラしている。しかし、鬼火も振り払われる。

タクヤ「あー、もう腹立つ！ゲンガー、凍える風で素早さを落とせ！」

ゲンガー「ガアアアアアア！……！！！」

フカマル「フカ……」

フカマルのスピードが一気に減退する。

タクヤ「カズナリ、こいつのスピードは落ちた。今のうちに弱らせる！」

カズナリ「ワニノコ、馬鹿力でフカマルを持ち上げてあの岩に叩きつけるんだ！」

ワニノコ「ワニヤワニヤ！」

フカマル「フカ？カフカー……！！！」

フカマルは岩に叩きつけられた。だがまだピンピンしてる。何、こいつ元から6V？

タクヤ「ゲンガー、凍える風をもう一回！」

ゲンガー「ガア……！！！」

フカマルのスピードはどんどん落ちていく。今度は穴を掘るで地中から攻撃しようとしてきた。

タクヤ「カズナリ、穴を利用しろ！」

カズナリ「ワニノコ、穴に向かって水鉄砲！」

ワニノコ「ワニヤツ！ワーニャ……！！！」

フカマル「フ……！！！」

別の穴から噴水のように拳がるフカマル。そのまま吹っ飛ばされてしまった。

俺は近づいてペシペシとフカマルの頬を叩く。しかし反応はない。気絶しているのだろう。

タクヤ「こいつ気絶してる。今のうちだカズナリ！」

カズナリ「行けえ、モンスターボール！」

フカマルがボールに収まる。気絶していることもあって、なんの問題も無く捕まえることができた。

カズナリ「やったやった、ゲットできた!!!!!!」

タクヤ「うんうん、よくやったぞカズナリ」

コトネ「ほとんどタクヤの指示だけだね」

ヒカリ「でも、ゲットできただけでもすごいじゃない！」

コトネ「そうね。見直したわ」

カズナリは、暴れん坊のフカマルをゲットした。ヒカリのコンテラスト出場のため、スイレンタウンに向けて旅はまだまだ終わらない。

To Be Continued...

**Episode 4 ポケモンコンテスト！ スイレン大会！！（前書き）**

この話はヒカリとタクヤ、二匹のマンムーが出てきます

ヒカリのマンムーをマンムーA、タクヤのマンムーをマンムーBと  
しています！



## Episode 24 ポケモンコンテスト! スイレン大会!!

ここはスイレンタウン。ヒカリが出場するコンテストが行われるところだ。今は、ヒカリとマンムーの練習が続いている。

サトシ「エナジーボール!」

ハヤシガメ『ガアアア!』

ヒカリ「氷の礫!」

マンムーA『ムウウウ!』

ハヤシガメとマンムーが、お互い技を溜める。

サトシ、ヒカリ「いつけええええええええええ!!」

そういうと二匹は技を食べてしまう。

コトネ「ええっ、食べた!?!」

カズナリ「どういうこと!?!」

タクヤ「俺の予想では、おそらくエネルギーチャージだろうな。技にはすごいエネルギーがあるんだから、同じタイプの技を食べれば素晴らしいエネルギーになる。そういうことだろう?」

タクシ「タクヤさんの言うとおり、ハヤシガメが偶然編み出したエネルギーチャージだ」

そんな話をしているうちに、ハヤシガメの背中の草が神々しい光を放ち、ヒカリのマンムーの体毛は、氷で覆われる。

サトシ「よおし!」

ポッチャマ『ポチャ』

ヒノアラシ『ヒノ』

ヒカリ「うまく出来た！」

コトネ「うわあ、すごい！」

タケシ「マンムー、コツをつかんできたなあ」

カズナリ「またまた驚いた」

タクヤ「面白い。俺も試してみようか？」

転送装置でマンムーを引っ張り出しながら言う。

タクヤ「出番だマンムー！」

マンムーB『ンムウ』

ヒカリ「あれ？タクヤさんもマンムー持ってたんだ」

マンムーA『ンムウウウ』

サトシ「でも、試すって……」

タクヤ「まあ見てなって。マンムー、氷の礫！」

マンムーB『ンムウウウ！』

同じように氷の礫を溜める。

タクヤ「今だ！」

あいつらがやっていたのと同じくらいのタイミングで指示。するとマンムーの体毛が凍った。

サトシ「スゲエ、一発で真似してるよ」

ヒカリ「すごい。あたし何度も練習したのに」

マンムーA『ンムウウ』

マンムーB『ンムウウ』

マンムーA『ンムウウ？』

マンムーB『ンム、ンムウ』

マンムーA『ンムウ』

なんかマンムー仲良くなってる。

コトネ「さっすがタクヤ。やるう」

カズナリ「一回で真似するなんて……」

タクシ「タクヤさんはすごいな」

タクヤ「まあな。戻れマンムー！」

マンムーを戻して転送する。

ヒノアラシ『ヒノツ、ヒノヒノツ！』

ヒカリ「ん？どうしたのヒノアラシ？」

ポツチャマ『ポチャ？』

ヒノアラシはヒカリに話しかける。

ヒノアラシ『ヒイノオオオオオ！！！！』

ヒノアラシは背中を炎を一気に燃え上がらせた。

サトシ「スツゲエ」

ヒノアラシ『ヒノオ、ヒノヒノオ！！！！』

ヒカリ「やるじゃないヒノアラシ！」

タクヤ「もしかして、コイツも出たいんじゃないか？」

ヒカリ「ああ。ごめんねヒノアラシ。今日はあたしたちのステージを見てて」

ヒノアラシ『ヒノツ？ヒノオオオ……』 O T L

おおっ、見事なO T L状態。

ヒカリ「今回はマンムーに出てもらおうと思ってるの。作戦はこうよ。一次審査はステージになれてるポツチャマで綺麗に決めて、」  
ポツチャマ『ポツチャマ』フンス  
ヒノアラシ『ヒノオ……』

頬を膨らませて拗ねるヒノアラシ。

ヒカリ「二次審査は、マンムーのバトルで魅せる！」  
マンムー『ンムウウウ』  
ヒノアラシ『ヒノツ』

ヒノアラシはそっぽをむいた。

コトネ「あーあ、拗ねちゃった」  
ポツチャマ『ポツチャツチャ』  
ヒカリ「ヒノアラシ」  
ポツチャマ『ポチャツ？』  
ヒカリ「あなたが応援してくれたら、あたしたちもってパワーが出て優勝できるから、ね？」

ヒカリはヒノアラシを抱きしめた。

ポツチャマ『ポチャア……。ポチャポチャ！』  
ヒノアラシ『ヒノオ！』

ヒノアラシは背中の中の炎を燃え上がらせた。—ヒカリが抱きしめて  
いる状態で。

サトシ「ヒカリ！」

タクヤ「大丈夫か？」

コトネ「大丈夫、ヒカリン!?」

ヒカリ「あはは、ダイジョーブダイジョーブ。今日こそ五個目のリボン、ゲットだぜ！」

ヒカリはサトシの真似をして言った。

そして、コンテストが開かれる。

司会「大変長らくお待たせしました！ポケモンコンテストスイレン大会のお時間でございます！」

司会の人が大きく宣言する。観客は一気に盛り上がった。

その時俺は、ヒカリのいる控え室にいた。

サトシ「よお、ヒカリ！」

ヒカリ「みんなあ!？」

コトネ「わああ、ヒカリンてばすっごくプリティ」

ヒカリ「えへっ、そっかな？」

コトネ「そうそう、この中でゼーったい一番！ね、サトシだってそう思うでしょ？」

サトシ「そりゃあ一番に決まってるさ！優勝はヒカリだからな！」

ピカチュウ『ピッカ!』

ヒカリ「もっちろん」

タクヤ「どっちも天然だな……」

鈍感二人が集まると手が付けられないから困る。

コトネ「その一番じゃないんだけど。サトシ絶対わかってないよね？」

タクヤ「ヒカリもかな」

タクヤ「ヒカリちゃんもね」

コトネ「えっ?」

コトネはヒカリの方を見てみる。ヒカリはサトシと話していた。

ヒカリ「ありがとうサトシ。今日こそ五個目のリボン、ゲットするわ!」

サトシ「頑張れよヒカリ!」

そういうと二人はハイタッチする。

コトネ「似た者同士か……。ん?」

コトネはムサシ(コジロウの変装)を見る。

コトネ「あの人のドレスカワイイ」

ヒカリ「ああ、ムサリーナさん」

ムサリーナ(笑)はギクツ、と反応する。

コジロウ「あっ、ど、どうもー」

コトネ「お知り合い?」

ヒカリ「うん」

コトネ「ふーん、このドレスほんっとカワイいわねえ。ねえねえ、どこで買ったの?」

コジロウ「あのその、えっと……忘れてしまいましたわ。それじゃあね」

ムサシ(笑)はどこかへ行ってしまった。

そして、一次審査開始の時は近づく。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
.  
.  
.

## Episode 25 ポケモンコンテスト！ パフォーマンスステージ！！

司会「それでは、一次審査に参りましょう！ポケモン一体による技の演技、パフォーマンスステージ！エントリーナンバー一番！どうぞ！」

タクヤ「いよいよだな」

コトネ「出た出たヒカリン」

サトシ「頑張れヒカリ！」

カズナリ「パフォーマンスステージって？」

タクヤ「ポケモンと技をいかに美しく見せるかのステージだよ」

サトシ「まあ見てるって」

いよいよヒカリのパフォーマンスが始まる。

ヒカリ「ポッチャマ、Charm up！」

ポッチャマ『ポッチャー！』

ポッチャマの登場。コトネはモンスターボールが変わっていることに気がつき、タクヤに聞いた。

コトネ「なにあのモンスターボール!？」

タクヤ「ボールカプセルだよ。いろんなシールの効果で、ポケモンの登場を盛り上げるんだ」

コトネ「カズナリ、ヘー！！」

タクヤ「噂には聞いていたが、ここまですごいとは……」

ヒカリはパフォーマンスを始める。

ヒカリ「ポッチャマ、渦潮を飛ばして！」



ポツチャマ『ポーーーーチャーーーーー!!!!!!』

ポツチャマは渦潮を空に向けて飛ばす。

ヒカリ「続いて我慢！」

ポツチャマ『チャーーーーー………』

ヒカリは我慢を支持。しかしヒカリの意図が読めないコトネとカズナリは疑問に思う。

コトネ「えっ、我慢!?!」

カズナリ「バトルで攻撃を受けたわけでもないのに!?!」

そんな話をしている間に、渦潮がポツチャマに迫る。

司会「渦潮がポツチャマの上に落ちてきます！」

ポツチャマ『ポツチャア!』

ポツチャマは我慢で増幅された渦潮のエネルギーで青く光り輝いていた。客受けもして、いい演技だ。

ヒカリ「やったねポツチャマ！」

ポツチャマ『ポツチャマ!』

ポツチャマは胸を張っていた。

サトシ「よしっ、いい演技だ」

カズナリ「ポツチャマの青いボディを魅せているんですね。よくわかります」

コトネ「一次審査って、ポケモンの一発芸大会という事ね？」





コトネ「ポツチャマやるじゃん！」  
ポツチャマ『ポツチャ！』フンス

見事な「フンス」状態のポツチャマ。

タクヤ「あのパフォーマンスなら、ヒカリちゃんも大丈夫だろ」  
ヒカリ「ありがとうございます、タクヤさん！」

そんな談笑を続けていると、結果発表が始まった。

司会「皆様、大変長らくお待たせいたしました！厳正なる審査の結果、見事一次審査を通過し、二次審査通過を決めたのは

こちらの八名様でございます！」

そう言うと、モニタに通過した人たちが表示された。見事にヒカリもその一人だ。

タクヤ「ヒカリちゃん、頑張ってたね」  
ヒカリ「うん、タクヤさん！」

いよいよ次は二次審査。とても楽しみだ！

To Be Continued...

## Episode 26 コンテストバトル！ マンムーの初コンテスト！！

司会「二次審査コンテストバトル、制限時間は五分間。技をいかに美しくキメて相手のポイントを削っていくか、ポケモンたちとの技のコラボをお楽しみください！」

司会は大きく宣言した。正直、生で見るのは楽しみだ。

カズナリ「二次審査はバトルなんですね！」

タケシ「バトルといってもジム戦とは違って、技の出し方や、かわす動きなんかが重要になってくるんだ」

タクヤ「要するに、勝つバトルじゃなくて、魅せるバトルということだね？」

タケシ「そうですね」

俺たちもそんな話をしているうちに、いよいよ第一回戦が始まるうとしていた。

司会「では、一回戦第一試合！かたやヒカリさん！こなたノブオさん！制限時間は五分！参ります！」

そう言つて、タイマーが動き始めた。

ヒカリ「マンムー、Charm up！」

マンムー「ンムウウウ！」

ノブオ「いけっ、グランブル！」

グランブル「グウアアオ！」

ノブオ君、君には悪いがここで退場願おう。

ノブオ「グランブル、炎の牙！」

グランブル「グアアアア！！！！」

司会「グランブル、炎の牙で見事な炎を吹き上げた！」

司会がそういうと、ヒカリのポイントが少し削られる。

コトネ「あれ？ヒカリンのポイントが減ったよ？」

タケシ「技を上手く見せたことが評価されると、相手のポイントを減らせるんだ」

カズナリ「コンテストバトルならではの、ということですね」

タクヤ「面白くなりそうだ……」

俺たちもそんな話をする。ヒカリは……

ヒカリ「マンムー、かわして氷の礫！」

マンムー「ンムウ！」

グランブル「グアウ！」

司会「炎の牙は空振り！」

グランブルの炎の牙をマンムーは素早く避ける。まあ、俺のマンムーのほうが速い。ノブオのポイントが減ってしまっ。

マンムー「ンムウウウウ！！！！」

司会「マンムー、かわすと同時に氷の礫の発動でございます！」

ノブオ君とグランブルは身構える。いよいよアレが出るぞ。身構えるより氷の礫を奪うほうが効果的だぞ、ノブオ君。

ヒカリ「今よ！」

マンムー『ンムウウウウ！ンム！』

ノブオ「は！？」

グランブル『グオ！？』

審査員勢「はああ……」

司会「マンムーが氷の礫を食べてしまいました！」

ノブオ君、グランブル、審査員勢、司会、観客、その他のコーデイナータ。俺たちを除く会場のすべての人たちが啞然としていた。そして、マンムーの体毛が氷に覆われた。

司会「これはなんと！マンムーの体毛が氷柱の様に凍って、その体を包んだー！！さながら氷の鎧を纏ったかの様です！！！」  
タクヤ「成功だな！」

初めて見るやりかたに、観客は大盛り上がりだ。

マンムー『ンムウ、ンムウウウ！！！』

ヒカリ「その調子よマンムー！続いて目覚めるパワー！」

マンムー『ンムウウ！』

司会「目覚めるパワーが氷の鎧を美しく照らします！」

ヒカリはめざパを指示。本当に生で見ると美しいな。

コトネ「わあ、キレー！」

ポツチャマ『ポチャア！』

タクヤ「上手いぞ！技を組み合わせて、マンムーをより美しく魅せてる！」

タクヤ「今度俺もバトルに取り入れてみようかな」

観客もすごく盛り上がってきた。

ヒカリ「突進！」

マンムー「ンムツ、ンムツ、ンムツ、ンムツ！」

ノブオ「はっ！？か、かわせっ！！！」

グランブル「グオア！！！」

マンムー「ンムウオ！！！」

マンムーの突進がクリティカルヒット。ノブオ君のグランブルは見事回転しながら吹っ飛ぶ。

ノブオ「あっ！？グランブル！」

見事バトルオフとなった。

司会「バトルオフ！！！セミファイナル進出は、ヒカリさんとマンムーです！」

マンムー「ンムウウ！！！！！」

ヒカリ「あ、あれ？もうバトルオフ？」

マンムーは雄叫びを上げるが、ヒカリは呆然としていた。

司会「氷の礫、目覚めるパワー、そして突進のトリプルコンボで、マンムーが一気に勝利でございます！」

マンムーの初陣は見事勝利となったが、ヒカリは少し落ち込んでいた。

ヒカリ「はああ……。ちよっと悔しいな……」

コトネ「悔しい！？なんで？マンムー勝ったのに変なの」

タクヤ「いいかコトネ？ヒカリはコーディネーターだ。俺たちトレー



ナーとは違って、戦闘不能にすることを目的としていない。魅せるのが専門だ。大して魅せる間もなくバトルオフとなれば、もつと美しく魅せたいと思うのは当然のことだ。そうだと、ヒカリちゃん？」

「…」

コトネ「でも勝ち負けは勝ちでしょ？」

タクヤ「そうだけど、コーディネーターであれトレーナーであれ、楽しまなきゃ損だろ？」

サトシ「タクヤさんの言う通りだ。コンテストバトルならもつと違った勝ち方があるってことさ」

カズナリ「うーん、奥が深そうだね……」

ヒカリ「よし、セミファイナルはもつと魅せるバトルにするわ！」

そして、続々とセミファイナル進出者が決まっていく。いよいよヒカリのセミファイナルだ。コジロウ（笑）とのバトルだが、残念ながらヒカリはここで終わりで。

司会「セミファイナル第一試合！かたやヒカリさん！こなたキャンディ・ムサリーナさん！ヒカリさんは只今リボン四個、ムサリーナさんはリボン二個、ファイナルに進出するのは果たしてどちらか！？」

残念ながらコジロウ（笑）です。

司会「制限時間は五分！参ります！」

タイマーが動き始め、試合開始となった。

ヒカリ「マンムー、Charmcup！」

マンムー『ンムウウ!!』  
コジロウ「行けっ、マスキツパ！」

やはりコジロウ（笑）に噛み付く。この行動で普通気づかんもんかねえ……？

司会「ムサリーナさん、またも体を張ったパフォーマンスで会場を沸かせます！」

ヒカリ「氷の礫！」

マンムー『ンムウウウ!!』

司会「マンムー氷の礫！再びあのパワーアップが見られるのでしようか！」

「ごめんなさい、見られません、はい。」

コジロウ「ツルの鞭！」

マスキツパ『キーパツ!!!!』

マスキツパが、氷の礫を食う直前にツルの鞭で奪い去る。

あとは書かなくても結果はわかるでしょう？アニメと同じ結果ですよ。詳しくは、ポケットモンスターダイヤモンドパール、146話をどうぞ。正直生で見ると、見ていられない酷い惨状でした。

あつ、手抜きじゃないですよ？本当ですよ？いやマジで。書くのが面倒とかじゃないですからね？ただ、こういう表現ですから。いやホントに。いやだからそういうことだって言ってるでしょ？疑ってるの疑ってないですよね疑うわけじゃないですよね？

そんなこんなで敗北したヒカリ。俺たちは控え室に駆け込んだ。

サトシ・コトネ「ヒカリ（ン）！」

ポツチャマ『ポチャチャ!』

ヒカリ「みんな!」

サトシ「残念だったな、ヒカリ」

ポツチャマ『ポチャ』

ヒノアラシ『ヒノ』

ヒカリ「ダイジョーブダイジョーブ!」

コトネ「やっぱり、ポツチャマたちで出たほうがよかったんじゃない?」

ヒカリ「かもしれない。でも、本番じゃなければわからないことっていっぱいあるんだ。サトシ。今回のステージで、あたしとマンムーのこれからの課題が見えたの!また練習の相手よろしくね」

サトシ「おう!」

コトネ「わあ、負けたっていうのに、ヒカリンポジティブね」

タクヤ「まあ、今回ダメでも次がある。今日がダメでも明日がある。明日は明日の風が吹く。これで落ち込んだりするヤツはその程度ってことだよ」

ブブー、とブザーが鳴る。ファイナルの結果が決まったようだ。

俺たちはモニタ越しに結果を見る。

司会「バルキーポイントアウトー!!!ファイナルを制したのは…

…キャンディ・ムサリーナさんです!!!」

コトネ「わあ、あの人優勝しちゃった!」

司会「今、キャンディ・ムサリーナさんに、スイレンリボンが授与されました!」

コジロウ(笑)、あんなに目立てばムサシが嫉妬するぞ。

今俺たちは、会場の外にいる。夕焼け空の下、ヒカリはマンムーにポフィンてにとり、

ヒカリ「はい、マンムー！」

マンムーはもぐもぐとポフィンを咀嚼する。

ヒカリ「明日からはまた練習。どんどん食べてパワーつけてね！」  
マンムー『ンムウー！ー！』

マンムーは頷き鼻息を噴射する。ポツチャマとヒノアラシは直撃を受けてのけぞった。

サトシ「よおし、気合入ってきたな！」

ピカチュウ『ピーカ！』

タケシ「五個目のリボンを目指して、俺たちも協力するよ」

ヒカリ「ありがとう。あたしも精一杯、頑張るわ！」

サトシ「ああ！」

カズナリ「仲間と旅するって、こういうとき良いよね」

コトネ「うん！なんていうか、『勝っても負けても、仲間がいる』って事ね」

タクヤ「そのまんま、だな」

コンテストも終わり、マンムーの初陣も終わる。マンムーが落ち込んでないか心配だったが、俺のマンムーに慰めさせることもなくて良かった。俺たちがシンオウにいられる期間も残り少なくなってきた。残り少ないシンオウの旅も、もっと楽しむぜ！

To Be Continued . . .

## Episode 27 サトシとピカリのタッグバトル!!

コンテストも終わり、シンオウ最後の一日となった俺たちは、ス  
イレンコロシウムへと足を運んできた。

サトシ「これがスイレンコロシウムか」

タケシ「シンオウ地方の歴代チャンピオンは、この場所で心と技を  
鍛えたと言われているんだ」

タクヤ「どおりで神々しい雰囲気だと思ったよ」

そう、ここは生だと本当にすごい威圧感がある。

コトネ「じゃあ私も、この場所でバトルすれば三回目のバッジをゲ  
ットできるかも」

タクヤ「コトネならだいじょぶさ」

カズナリ「シンオウ地方最後の一日の、いい思い出になりそうだね」

タクヤ「なあコトネ、カズナリ」

コトネ「ん？」

カズナリ「何ですか？」

俺は少し前から考えていたことを話す。

タクヤ「俺、今日までじゃなくて、もう少しシンオウ地方にいるよ」

コトネ「えっ!?!」

カズナリ「どういうことですか!?!」

サトシ「タクヤさん、シンオウ地方に残るんですか!?!」

ピカチユウ「ピカピカ!?!」

タクヤ「ああ」

俺は、考えたことすべてを話す。

タクヤ「コトネとカズナリは、旅立ちからずっと俺と一緒にだったただる？」

コトネ「うん」

カズナリ「はい」

タクヤ「でも、俺たちがこれからずっと一緒にいられる保証はない。最初から最後までベテラントレーナーと一緒にいたら、自分たちでは何も出来なくなるんじゃないかって心配に思ってたね。それに、研究者を目指す身としては、もう少し見て回りたいんだ、シンオウ地方を。だが、サトシ君たちと一緒に行くわけではないんだ」

サトシ「どういうことですか？」

タクヤ「要するに、ここで一人で旅をするってこと。強いトレーナーも見つけてみたいし、いろいろなところを見て回りたい。ナナカマド博士の言っていたシンジ君という子とも会ってみたいしね」

サトシ「ヒカリ、タケシ、シンジ!？」

コトネ「誰それ？」

タクヤ「おっ、サトシ君たちは知っているのか？どんな子が教えて欲しいんだが」

サトシ「バトルが強いけど、すごくヒドイ奴です!」

タクヤ「ヒドイ?」

サトシ「バトルで負けたポケモンは、弱いからいららないと言ってすぐに逃がすんです」

タクヤ「それはヒドイな……」

ポケモン廃人としては当たり前だが、この世界では随分とポケモンに愛着がわいた。それにこの能力があるから弱くなるなんてことにはならないし。

タクヤ「して、外見の特徴は？」

ヒカリ「こーんなつり目で、薄紫色のこのくらいの長さの髪の毛を  
したいけ好かないヤツです」

ヒカリは目を釣り上げて、肩くらいを指し示し、外見の特徴を教  
えてくれた。

タクヤ「つまりそいつは冷酷ないけ好かないクズ野郎ってことか。  
もしも会ったらキツツイ灸を据えてやるか……。ま、この話は終わ  
り！コトネとカズナリのペア対サトシ君とヒカリちゃんのペアでタ  
ツグバトルでもどうだ？」

タクシ「その前にお祈りだ」

ヒカリ「ああ、そっか」

コトネ「お祈り？」

俺たちはディアルガとパルキアの像の前に立つ。

コトネ「これってポケモン？」

ヒカリ「ディアルガとパルキアよ」

タクシ「シンオウ地方の伝説のポケモンだ」

コトネ「ええっ！？そうなんだ、スツゴイ！」

カズナリ「じゃあ、ここは神聖な場所なんですね？」

ヒカリ「この像に手を触れて祈ったあとトレーニングすると、トレ  
ーナーやブリーダーの願いが叶う。そんな言い伝えがあるのよ」

コトネ「手を触れてか……。って、タクヤもう祈ってる！」

俺は話を聞かず、既に乗っている。願いはジョウトリーグ優勝と、  
研究職に就くことだ。もともと口実だった研究職も、今ではかなり  
興味をもっている。

コトネ「ねえ、サトシは何を願ったの？」

サトシ「もちろん、ポケモンマスターになることさ。でもその前に、シンオウリーグで優勝しなきゃな！」

コトネ「へえ、サトシらしいね」

ヒカリ「コトネはどんなお願いをしたの？」

コトネ「やっぱり、ジヨウトリーグで優勝することね！」

タクヤ「おっ？俺と同じだな。負けねえぞ？」

コトネ「タクヤは強敵だけど、本気を出したタクヤにも勝てるように、頑張って鍛えるの！それともう一つ！」

ヒカリ「もう一つ？」

コトネ「ジヨウトに帰ったら、素敵な仲間と旅ができればいいなって」

カズナリ「へえ、コトネはそんなことも願ったんだ」

サトシ「仲間がいれば、お互い励まし合ったり、鍛えたりできるもんな。タクヤさんは？」

タクヤ「俺はさつき行った通り、ジヨウトリーグ優勝。それと、立派な研究者になることだ。む？」

サトシ「どうしたんですか？」

そろそろロケット団登場だな。俺はテッカニンとハッサムを出した。直後、地鳴りが始まる。

サトシ「なんだ？」

地面からドラピオンロボの腕が伸びる。ふっ、あまいな。

タクヤ「おっと危ない。テッカニン、ハッサム、シザークロスで叩っ斬れ！」

テッカニン「テッカ！」

ハッサム「ハッサ！」





ヒカリ「頼んだわよ、ヒノアラシ！」

モウカザル『ウキヤァー！！』

ヒノアラシ『ヒノヒノァー！！』

タクヤ「おいおい、どっちも炎タイプって、相性付きやすくなるだけじゃねえか」

カズナリ「炎タイプが二体。それならこっちは、ワニノコ、お願いします！」

ワニノコ『ワニワニ！！』

タクヤ「ほらな、相性的にサトシ君とヒカリちゃんは危ないぞ」

コトネ「行けっ、チコリータ！」

チコリータ『チコチコー！！』

タクヤ「光の壁、か」

サトシとヒカリは気づいていないが、チコリータには光の壁がある。それどころか、ペアであるはずのカズナリも気づいていなかった。

サトシ「コトネ、カズナリ、遠慮はしないからな！モウカザル、火炎放射！」

ヒカリ「ヒノアラシ、スピードスター！」

モウカザル『ウキヤァー！！！！！！！！』

ヒノアラシ『ヒィノァー！！！！！！！！！！』

コトネ「チコリータ、光の壁！」

チコリータ『チコチコッ！！』

チコリータはワニノコを庇うように光の壁を展開して火炎放射を防ぐ。

コトネ「よし、光の壁でダメージを弱めたわ！」

カズナリ「ワニノコ、モウカザルに水鉄砲！」

ワニノコ『ワニヤ！ワーニヤー！！！！』

モウカザル『ウキャツ、キャキャ！！！！』

サトシ「ああつ、モウカザル！」

カズナリ「チコリータを選んだのは、光の壁を使ったためだったんだね！」

コトネ「そうよ、なかなかやるでしょ？」

タクヤ「カズナリ、ペアが使う技くらい記憶しとけよ……」

サトシ「頑張れヒノアラシ！」

ヒカリ「モウカザルのダメージが大きい。ヒノアラシ、スピードスター！」

ヒノアラシ『ヒイイノツ！』

えつ、何？ヒカリって馬鹿？光の壁使ってるのに特殊技とかほんと馬鹿？

ヒノアラシ『ヒノツ！？ヒノヒノツ！』

ヒカリ「落ち着いて、ヒノアラシ！」

コトネ「チコリータ、ヒノアラシに葉っぱカッター！」

チコリータ『チイコツ！！』

ヒノアラシ『ヒノツヒノツ！』

カズナリ「ワニノコ、アクアテール！」

ワニノコ『ワー、ワニヤツ！』

ヒノアラシ『ヒノツ！』

サトシ「ヒノアラシはまだバトルに慣れてない。攻撃が通用しなくて慌てたんだ」

ヒカリ「頑張つて、ヒノアラシ！」

完全にコトネたちのペース。サトシたちは危ない状況だ。

コトネ「チコリータ、ソーラービーム！」

カズナリ「ワニノコ、噛み砕く攻撃！」  
チコリータ「チコオオオオ………」  
ワニノコ「ワニワニワニワニ！」

チコリータがチャージしている間にワニノコが攻撃。いい戦法だ。

サトシ「モウカザル！ヒノアラシを助けるんだ！」  
モウカザル「ウキヤツ！」  
ヒカリ「ヒノアラシ、煙幕よ！」  
ヒノアラシ「ヒノオオオ！」  
ワニノコ「ワニヤ！？ワニヤワ！」

そうしている間にチャージ完了のチコリータだ。

コトネ「チャージ完了！」  
カズナリ「ワニノコ、伏せる！」  
コトネ「ソーラービーム、発射！」  
チコリータ「チイコオオオオオ……！！！！！！！！！！」  
モウカザル「ウキヤ！？」  
サトシ「モウカザル、穴を掘る！」  
モウカザル「ウキヤキヤキヤキヤ……！！！！！！！！！！」

モウカザルは穴に潜って避けた。うんうん、いい戦法！

コトネ「ええっ！？」  
カズナリ「かわされた!？」  
ワニノコ「ワニヤ!？ワニヤ……！！！！！！！！！！」  
モウカザル「ウキヤアアア……！！！！！！！！！！」

ワニノコの下からモウカザルが飛び出しアッパーを食らわす。吹

っ飛ぶワニノコにチコリータも巻き込まれてしまい、二匹は地に伏せった。カズナリはあわあわしている。

カズナリ「どうしよう!?!」

コトネ「大丈夫!ポケモンたちを信じて!チコリータ、あなたは立てる!まだ戦えるわ!」

チコリータ『……チイイ、コッ!』

タクヤ「うんうん、コトネに似て負けず嫌いなチコリータだ」

カズナリ「コトネの言うとおりだ。ワニノコ、僕も君を信じてるよ」  
ワニノコ『ワニヤッ!ワニヤーーー!』

そのとき、ワニノコが光に包まれた。

タクヤ「来たか……」

サトシ「あれは!?!」

アリゲイツ『アリゲイツ!?!!』

カズナリ「ワニノコが、アリゲイツに進化した!」

二人は図鑑を取り出す。

アリゲイツ 大顎ポケモン。ワニノコの進化系。一度噛み付くと、牙が抜けるまで絶対に離さない。抜けた牙はすぐに生えてくる。

使える技は、噛み砕く、アクアテール、馬鹿力、ハイドロポンプ

カズナリ「すごいぞ!そんな技も覚えたのか!よしアリゲイツ、ハイドロポンプ!」

アリゲイツ『アアアツリゲイツ!?!?!!』

ハイドロポンプは二匹にクリティカルヒット。大ダメージを追うモウカザルとヒノアラシ。

コトネ「これで止めよ。チコリータ、モウカザルに体当たり！」  
タクヤ「油断して馬鹿正直に突っ込むとか、まだまだだな……」  
ヒカリ「ヒノアラシ、火炎車！」  
サトシ「モウカザル、火炎放射で援護しろ！」

ヒノアラシは火炎車をして突っ込む。モウカザルの火炎放射はヒノアラシに当たり、火炎車をより速く、より強力にした。

タクシ「チコリータ戦闘不能！」  
カズナリ「アリゲイツ、ヒノアラシにアクアテール！」  
アリゲイツ「アリゲイツ！！！！！」  
ヒカリ「よけて、ヒノアラシ！」  
サトシ「モウカザル、マツハパンチ！」  
モウカザル「ワアアアキヤーーーー！！！！！」

見事類に一撃。アリゲイツは吹っ飛ばされた。

タクシ「アリゲイツ、戦闘不能！よって勝者、サトシとヒカリ！！」  
タクヤ「いやあ、すごかったよ。ま、反省点はいろいろあるんだがな」パチパチ

四人はそれぞれのポケモンをねぎらっていた。

タクヤ「さあ、サトシ君。今日でお別れなんだ。コトネとカズナリ  
の時間があるうちに、フルバトルをしよう」  
サトシ「はいっ！」

次は最後のフルバトル。俺は手持ちを入れ替えてバトルするつもりだ。さて、どう出るサトシ？

To Be Continued . . .

Episode 28 タクヤvsサトシ! 最後のフルバトル!!

タクヤ「これより、タクヤ対サトシのバトルを行う!使用ポケモンは6体。どちらかのすべてのポケモンが戦闘不能になったときバトルは終了とする!それでは、始め!」

タクヤ「サトシ君、君は本当に面白い!だからこそ燃えるんだ!叩つ斬れ、ハツサム!」

ハツサム「ハツサム!」

サトシ「タクヤさん、本気でいきますよ!モウカザル、君に決めたい!」

モウカザル「ウウキヤアアア!!!」

タクヤ「そいつを出すと思っていた!ハツサム、蜻蛉返り!」

ハツサム「ハツサム!」

モウカザル「ウキヤア!」

サトシ「ああ、モウカザル!」

ハツサムは蜻蛉返りでモウカザルを吹っ飛ばす。そして、ボールに戻っていった。

タクヤ「さあ、蜻蛉返りの効果でポケモンの入れ替えだ!空を斬れ、プテラ!」

プテラ「フアアアアアアアアア!!!!!!!!!」

サトシ「プテラ!?モウカザル、火炎放射!」

モウカザル「ウキヤアア!」

タクヤ「プテラ、高速移動しながらロックカット!」

プテラ「フアアアアア!!!!!!」

プテラのスピードがどんどん上がり、ついには目で捉えられなくなった。



タクヤ「影分身！」

プテラ『フアアア！フアアアア！！』

プテラのすごい数の分身が出てくる。

タクシ「あのプテラ、そうとう鍛えられているな……。それにしてもプテラとは、あの時を思い出すな」

ヒカリ「あの時？」

コトネ「あの時ってなんのこと？」

タクシ「サトシと俺がまだカントーを旅していた頃、化石の発掘現場でロケット弾が起こした爆発に巻き込まれたんだ。そのとき地下の洞窟で眠っていたプテラを怒らせてしまっただ。あいつがプテラに連れ去られたんだ」

カズナリ「ええっ！？大丈夫だったんですか！？」

タクシ「ああ。あいつのリザードがリザードンに進化して、プテラと戦った。そして最後は、通りすがりのプリンのおうで眠ったんだ」  
ヒカリ「へー、すごい体験したのね」  
タクシ「ああ」

そんな話をしている間も、バトルは続いている。

タクヤ「プテラ、地震だ！」

プテラ『フアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！』

モウカザル『ウキヤキヤキヤキヤ！』

サトシ「落ち着くんだ！マッハパンチ！」

タクヤ「無駄だ！翼で打つ！」

プテラ『フアアアアアアアアアア！』

モウカザル『ウキヤア！ウ、キヤキヤ……………』

タクシ「モウカザル、戦闘不能！」



フォレトスは撒菱を3回、毒菱を2回撒き、ロックカットをする。

サトシ「ピカチュウ、10万ボルトだ!」

タクヤ「無駄だ!フォレトス、丸くなるからの転がるではじき飛ばせ!」

ピカチュウ「ピカアチユーーーー!!!」

フォレトス「フォオオオオオ!!!」

タクヤ「フォレトス、ピカチュウにあたる直前にフルパワーで大爆発!」

フォレトス「フォオオ、フォオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

サトシ「ピカチュウウウウウウウウ!!!」

ピカチュウ「ピ、ピカアア……」

フォレトス「フォオオ……」

タクシ「ピカチュウ、フォレトス、両者戦闘不能!」

サトシ「ピカチュウ!大丈夫か?ゆつくり休んでくれ。」

タクヤ「済まないなフォレトス、無理させて。そこで見ててくれ」

フォレトス「フォオオ……」

フォレトスをボールに戻さず後ろに置く。謝ると、気にするなど言わんばかりに鳴いた。

タクヤ「さて、次のポケモンと行くか。噛み砕け、バンギラス!」

バンギラス「バンギラアアアアア!!!」

サトシ「バンギラスか……。ハヤシガメ、君に決めた!」

ハヤシガメ「ンガア!ンガッ、ンガッ……」

撒菱、毒菱、ステルスロックが効いている。

コトネ「あの時のバンギラスね」  
ヒカリ「バンギラスかあ。カッコイイなあ」

バンギラスは、出てくると同時に砂嵐を巻き起こす。

タクヤ「特性の砂起こしだ。どう対処する？バンギラス、噛み砕く！」

バンギラス「バアン！」

サトシ「ハヤシガメ、エナジーボール！」

ハヤシガメ「ンガアアア！！！」

バンギラスの噛み砕くをかわしたハヤシガメはエナジーボールを放ち、バンギラスに直撃した。だが、

サトシ「き、効いていない！？効果は抜群なのに」

タクヤ「効いているよ。だが、岩タイプは砂嵐のとき、特殊技に対する防御力が上がるんだよ。バンギラス、ストーンエッジ！」

バンギラス「バアアアアアアアアス！！！！！！！！！」

サトシ「マズイ、戻れハヤシガメ！」

タクヤ「懸命な判断だ。まあ、俺も入れ替えるとしよう」

サトシ「ブイゼル、君に決めた！」

ブイゼル「ブイブイ！！ブイツ、ブイツ………」

ブイゼルにも撒菱、毒菱、ステルスロックが効いている。

タクヤ「うんうん、面白いねえ。叩つ斬れ、ハッサム！」

ハッサム「ハッサム！」

俺はハッサムを再び出す。

サトシ「ブイゼル、アクアジェット！」  
タクヤ「回転して受け流せ！」  
ブイゼル「ブウウイ！！！！！」  
ハッサム「ハッサム、ハッサ！」  
ブイゼル「ブブイ！？ブウウイ！！！」

ブイゼルはハッサムに受け流され、上空に向かって飛ぶ。

タクヤ「ハッサム、飛べ！電光石火から虫喰い！」  
ハッサム「ハッサー！！」  
サトシ「ブイゼル、回転してかわせ！」  
ブイゼル「ブウイ！！」  
タクヤ「コンテストの応用か。ハッサム、連続斬り！」  
ハッサム「ハッサ！ハッサ！ハッサ！」  
サトシ「ブイゼルウウー！！」  
ブイゼル「ブイ！ブイ！ブイ！ブ、ブイ……………」  
タケシ「ブイゼル、戦闘不能！」  
サトシ「ありがとうブイゼル、ゆっくり休んでくれ。やっぱりタクヤさんは強い！ハヤシガメ、君に決めた！！！」  
ハヤシガメ「ンガア！ンガッ、ンガッ……………」

ハヤシガメは撒菱、毒菱、ステルスロックを喰らいふらつく。さっきのダメージと重なって辛いのだろう。

タクヤ「戻れ、ハッサム！押し潰せ、ベトベトン！」  
ベトベトン「ベエトオベエトオオン！！！」  
サトシ「今度はベトベトン！？ハヤシガメ、ロッククライム！」  
タクヤ「無駄だ！シャドーパンチ！」  
ベトベトン「ベエドオ！！！！！」



ドオオオオオオオン!!!!!!!!!!という音を立て、爆発する。  
そして、

タクヤ「プテラ!?」

サトシ「ムクホーク!」

何と、二匹とも地に伏せ、倒れていた。

タクシ「プテラ、ムクホーク、両者戦闘不能!」

タクヤ「すごいぞサトシ君!相打ちとはいえ俺のポケモンを倒したのは君が初めてだ!」

サトシ「そうですか!?!ありがとうございます!?!」

タクヤ「さあ、君の最後の一体、本気で相手をしよう!ぶち壊せ、ボーマンダ!」

ボーマンダ『マンダアアアアアアア!?!?!?!』

タクヤ「さあ、これが俺のもつポケモンの中でも、5本の指に入る真正銘の切り札ポケモンだ。どう出る、サトシ君!」

サトシ「切り札だろうが何だろうが、俺は俺の全力を尽くすだけです!グライオン、君に決めた!」

グライオン『グライオンッ!?!?!グラッ!』

ステルスロックの影響でダメージを受けた。さあ、ラストバトルと行くか。

タクヤ「本気で行くぞ!龍の舞!」

ボーマンダ『マンダアアアアアアア!?!』

ボーマンダは神秘的な踊りを踊る。

サトシ「グライオン、炎の牙！」  
グライオン『グライオン！』  
タクヤ「竜の波動で牽制！」  
ボーマンダ『マンダ！』  
グライオン『グラッ！？』  
サトシ「グライオン、シザークロス！」  
タクヤ「噛み砕くで受け止める！」  
グライオン『グライオン！』  
ボーマンダ『マンダッ！』

受け止められず、攻撃を受けるボーマンダ。しかし、少しのけぞっただけだった。

タクヤ「ボーマンダ、全力、全壊！！」  
ボーマンダ『マンダ！』  
サトシ「グライオン、ギガインパクト！」  
グライオン『グライオン！！！！』  
タクヤ「ボーマンダ、逆鱗！」  
ボーマンダ『マンダアアアアアア！！！！！！！！！！』  
グライオン『グライオオオオオオツツ！！！！！！』  
サトシ「グライオーーーーーー！！！！！！！！！！」  
グライオン『グ……グラッ……』  
タクヤ「グライオン、戦闘不能！よって勝者、タクヤ！」  
タクヤ「ありがとうボーマンダ、よく頑張った。サトシ君、君は本当にすごい。俺相手にあそこまでやる奴は初めてだった。楽しかったよ」  
サトシ「はいつ、俺も楽しかったです」

俺たちはバトルを終えた。結果は俺の勝利。だが、サトシは俺のポケモン相手に相打ちまでするとは、本当にすごかった。



そして、飛行場……

カズナリ「タケシさん、ありがとうございました。またいろいろ教えてくださいね」

タケシ「ブリーダー修行は、まずポケモンと接することから始まる。これからも様々なポケモンとトレーナー、コーディネーターたちと触れ合うといいよ」

カズナリ「はい、頑張ります!」

タクヤ「カズナリの父さん。俺、もう少しシンオウに残ります。まだまだしたいことがいっぱいあるんです」

カズナリ父「そうか。だったら、帰ってきたらコトネとカズナリをよろしく頼むよ」

タクヤ「はいっ。コトネ、次に会うときはジョウトリーグだ。また会おうぜ!カズナリもな」

コトネ「うん」

カズナリ「はいっ!」

タクヤ「コガネジムのジム戦、頑張れよ」

コトネ「うん。サトシは次、8個目のジム戦でしょ?」

サトシ「ああ。ナギサジムのジム戦に勝ったら、いよいよシンオウリーグだぜ!」

コトネ「ヒカリンも5個目のリボン、頑張ってね」

ヒカリ「ええ!絶対ゲットして、グランドフェスティバルに出場するわ!」

カズナリ父「どうやら息子たちがずいぶんお世話になったようだね、ありがとう。これは私からのお礼だよ」

そう言っつて、ポケギアを取り出した。

コトネ「わあ、ポケギアじゃない!」

サトシ「いいんですか?」

カズナリ父「勿論！」

タケシ「ありがとうございます！」

タクヤ「そうだ。サトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君シンオウで君たちと旅できて、楽しかったよ。こっちは俺からの礼だ」

そう言つて、孵卵器に入った卵を取り出した。

タクヤ「一人一個ずつ。5個あるから、コトネとカズナリにもやるよ」

タケシ「タクヤさん、ありがとうございます！」

コトネ「ありがとう、タクヤ！」

カズナリ「何が生まれるか楽しみだなあ」

サトシ「6体フルに持つてるから、手持ちを考えないと！」

ヒカリ「何が生まれるのかなあ！」

タクヤ「生まれたら報告よろしくな」

そう言つて、タケシに渡されたポケギアに俺のを登録した。

タクヤ「それじゃ、俺はこうしてる時間も惜しいからもう行くよ。

出番だプテラ！」

プテラ『フアアアアアアアアアアア！』

俺はプテラにまたがって飛び上がった。

タクヤ「じゃあ、サトシ君、ヒカリちゃん、タケシ君、また会えたらどこかで！コトネ、カズナリ、ジヨウトリーグでまた会おう！カズナリの父さん、無理言つてすみませんでした！じゃーな！」

こうして俺は飛び去った。俺のシンオウでの旅はまだまだ続く。

T  
O  
B  
E  
C  
O  
N  
T  
I  
N  
U  
E  
D  
.  
.  
.

## Episode 29 タクヤ vs シンジ！！

タクヤ「ふう。プテラ、一旦この辺で下ろしてくれ」  
プテラ『フアアア！』

ども、コトネたちとジヨウトに帰らなかったタクヤです。俺は今、シンジを探しています。目的はもちろんバトルです。

タクヤ「なんか、一人旅始めてからもう4日くらい経つけど、結構寂しいな……。コトネどうしてるかな……。って、なんでまっさきにコトネが出てくんのさ!？」

プテラ『フアアア?』

タクヤ「ああ、悪い。プテラは戻っててくれ」

俺はプテラをボールに戻す。

タクヤ「あれ?あの憎たらしいつり目に紫色した長めの髪って、向こうから歩いてくるのは信じじゃないか?」

なんと運の良いことに、前からシンジが歩いてきているのである。よし、バトルだ。

タクヤ「なあ、君?」

シンジ「何ですか?」

おつ、年上には敬意を払う。案外礼儀正しいな。

タクヤ「ナナカマド博士から聞いたんだ。君がシンジ君だね?」  
シンジ「はい、そうです。何か用ですか?」

タクヤ「ナナカマド博士、サトシ君と会ってから、君がなかなかできるトレーナーだと聞いてね。俺は君に興味をもった。俺とバトルして欲しいんだ」

シンジ「あいつと!? まあ、バトルならいいですが」

タクヤ「よっしゃ。じゃあ、向ここの広場でいいかな?」

シンジ「はい」

そう言うと、近くの広場に来た。よし、いよいよバトルだ。

タクヤ「使用ポケモンは3体で道具の使用は禁止。入れ替え自由でいいね?」

シンジ「はい」

タクヤ「じゃあ、俺がお先に。掻き回せ、テッカニン!」

テッカニン「テッカ!」

俺はテッカニンを繰り出す。

シンジ「色違いだと!? ブーバー、バトルスタンバイ!」

ブーバー「ブーバー!」

タクヤ「先行はそっちに譲ってあげるよ」

シンジ「行くぞ、ブーバー。火炎放射!」

ブーバー「ブーバー!」

タクヤ「テッカニン、フルスピード行くぞ! 高速移動からの影分身!」

テッカニン「テッカ!」

すごい数の分身が現れる。

シンジ「速い!? ブーバー、分身全てに火炎放射!」

ブーバー「ブーバー! ブーバー!」





ブーバー『ブーバアアア!』  
ボーマンダ『マアアンダアアアア!!!!!!!!!!!!!!!』  
ブーバー『ブー!?!ブーバアアアアアア!』  
タクヤ「俺の勝ちだよ、シンジ君」  
シンジ「クソ!」

シンジは膝を付く。

タクヤ「君が負けた理由は簡単さ。でもこれは俺が教えていいことじゃない。君自身が気づくべきことだ。これに気づけないなら、この先ずつと君は俺に勝てないね。む?」

ポケギアが鳴る。電話だ。

タクヤ「もしもし?」  
タケシ「もしもしタクヤさん?卵孵りました」  
タクヤ「お、タケシ君。卵が孵ったのか」  
タケシ「はい。俺のがヨーギラスです」  
サトシ「タクヤさん、俺の卵はダンバルでした」  
ヒカリ「タクヤさん、私のはミニリュウでした」  
タクヤ「ヨーギラスにダンバルにミニリュウか。大事にしてくれよ」  
サトシ「ヒカリ、タクシ「はい!」」

そう言っつて電話が切れた。いやあ、三匹とも強くなるぞ。

シンジ「タクヤさん、またいつか俺と戦ってください。次こそは俺が勝ちます」

タクヤ「まってるよ。出番だプテラ!」

プテラ『ファアアア!!!』

タクヤ「それじゃ、俺はジョウトに帰るよ。いくぞプテラ!」



プテラ『フアアアア！』

シンジと別れ、俺はジョウトに戻る。帰ったらジム戦が待っていて、ジョウトリーグでコトネたちと会う約束をした。さて、次にかいときは、コトネは強くなってるだろうか。

T o B e C o n t i n u e d . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

---

人生オワタ＼(^o^)/からポケモンの世界に転生した

2011年12月24日11時49分発行